

久留米躑躅誌

久留米 赤司廣樂園

(第五版)

明治時代の日本郵政の記録



實録の書紀は明治五十年撰定  
以下漢字傳記全集  
此後、編集者等四、五、百、心、裁、  
書紀の書紀三巻は明治五十年撰定

日本帝國政府  
郵政省  
明治三十四年  
大正二年三月二十七日

# 師恩の界

辭題下開名正田前賢男

師恩の界 獨躰米留久



生先尊利川登



生先那次健井藤



久留米種毛彫花壇



久留米種毛彫苗圃



録授章受初代赤司喜次郎



久留米園玉作盆栽花壇



久留米園白然盆栽花壇

### 久留米躑躅誌序

余をして郷自慢を云はしめば、躑躅花は云ひたきもの其の一なり。  
 若し夫れ單に美と艶とを以て、花の品位を評せんか、百花或は躑躅に如かざるべし。梅も、櫻も、  
 薔薇も、芍薬も、牡丹も又菊もよ。  
 躑躅の一笑、眞に百媚生ず、疑ふ者は、乞ふ晩春の日、躑躅の花を看よ。  
 斯花を創造する者は誰ぞ、曰く故坂本元藏翁なり。博覽會の二等賞牌を冠せしめ、以て斯花を天  
 下の名花と爲したるは誰ぞ、曰く廣樂園主人赤司君なり。我郷は其勞に依りて、久留米餅の外に、  
 又一の名産を得たり、余は我郷の爲めに、斯花栽培に功勞ある今昔の諸氏に多謝す。  
 故坂本翁斯花創裁の際に於ける苦心忍耐は、實に人生一種の立志教訓とするに足る。斯花満開、  
 紅、白、丹、紫又淡濃、艶麗を呈するの時、看者花に向て、其由來往時を問へ、花や必ず今日の美  
 は先輩苦心の結果、先人丹精の報酬なるを語らん。  
 余性、頗る花を愛す、聞あれば、多く花邊に在り、花や博愛、觀者の貧富に依りて、其の色を變  
 へず、花や天真、對する者の貴賤に依りて、其の容を更めず、相將富豪に呈するだけの美と艶  
 とは、車夫にも、馬丁にも又乞食にも之れを呈するなり、世の人乞ふ、花を愛せよ、書して序となす。  
 明治三十八年一月

是々菴 淺野 陽吉

久留米躑躅誌序

我亦司喜次郎翁の經營に係る久留米廣樂園は其名風に海内に喧傳し車來馬聚遠客の特に來りて之れを觀覽するもの日一日に多し、嘉木珍花四時美景あり余嘗て其園に遊び一聯を題して云ふ引客自南北、看花無夏冬、自ら以て實況と爲す而して其群芳中香色の最も看瓶に資すべきものは先づ指を梅と菊と躑躅とに屈せんか。

廣樂園の躑躅は江湖の共に傳へて珍とし奇とし貴美して措かざる所なり。緋白淡濃其種類は亡慮數百に達し一盃一根枝を交えて形態花傘の如く、其瘦株を連ねて之れを並觀するに當りては絢爛目を奪ひ所謂錦棚の美も亦與もに比するに足らざるものあり。舊記を案するに今を距ること一百餘年の前我久留米に坂本元藏といふ人あり性癖花を愛し躑躅の栽培に於て尤も心力を盡し遂に此新花養成の工夫を發明せり。然る後同好の士相傳へて明治の初に及びしが當時は研究の猶ほ未だ積まざる結果として花種至て單純なり從て世人も亦久留米に此名花あるを知らず無雙の脆質徒らに家家の園圃に埋没して荆棘鸞鳳の歎あるを免れざりしが後、我亦司翁の廣樂園を開設し其園藝に關する獨特の手腕を以て花容に色彩に銳意改善を加へ汎く江湖に願付するに及んで茲に始めて今日の盛を見るに至れり其功固より大なり特筆せざるべからず。

余は亦司翁の平生に就て一言せんぞ欲す、翁人となり穩健篤實古の君子の如し四男三女あり情誼の厚き嫁娶既に畢りて猶ほ其家を分つを願はず父は慈に子は孝に姉妹相親み一家の中和氣霽然とし

て常に春風を藏するが如し同心協力して以て其業に従事す詩人後藤東菴先生爲めに詩を贈りて云ふ「欽君胸宇思無邪、天祐吉人嘉福加、家有一團和氣在、發成千紫萬紅花」と、人苟も此花を觀て其美を賞せば亦宜しく其家庭の美を聯想すべきなり。

廣樂園の梅花菊花も亦世人の齊しく歎美する所なり横斜の影、冷艶の色、觀るとして人の心目に適せざるは無く從つて春に秋に觀客極めて多し其他園内有る所の花木は大抵佳種逸品にして一枝一葉を擧ぐるも猶ほ且つ看瓶に値ひす此等は余當さに他日を待つて讀すべく今は唯だ筆を此躑躅に止む。

大正二年 初夏

宮崎來城

自序

弊園、蘭菊の栽培を家業の一とし、日々丹精を凝らすこと茲に多年、明治三十六年第五回内閣勸業博覽會の開設せらるゝや、弊園出品の盆栽蘭菊第二等賞牌を受領す、弊園の光榮誠に之れに過ぐるなかりき。

爾來、或は郵書に依り、或は來臨の上、斯花栽培沿革の詳細を尋問し給ふ四方同好の士日に多く、而して斯花の沿革は弊園の固より之れを詳にせんと欲する所なりしかば、過般來、業務の餘暇、熱心其調査に従事したり。

斯花人工栽培の業起りてより、今に至るまで一百餘年を経たり、往年栽培家の手に成れる記録固より斷簡零墨に過ぎざるも、今日迄幸に滅却に歸せず、據りて以て其淵源來歴を窺ふに足るものあり、又栽培上の老大家にして今尚ほ生存せる人あり、就きて以て其口述を得見聞の事實を蒐集編成して、遂に此の篇を草せり、或は誤謬なきに近からんか。

明治三十七年四月

筑後 廣樂園主 赤司喜次郎

久留米蘭菊誌第五版序

本誌は考喜次郎が明治六年に廣樂園を起し園藝の業を創めて以來昨昭和七年を以て滿六十周年を迎送し得ました事を私共後継者一同衷心より喜悅に耐へず之を記念せんが爲め考の遺著久留米蘭菊誌第四版に増訂を施したものであります。

回顧すれば考が甫めて久留米蘭菊誌を發刊しましたのは明治三十七年四月でありましたが久留米蘭菊の好評と共に望外の歡迎を受けまして爾來版を重ねること四回に及びました。其第四版を發行しましたのは大正八年七月で其間に於ける蘭菊の進歩は品種の改良に、栽培裝飾の方法に、販路の擴張に又得難き光榮の事項等總ての點に於て頗る著しきものがありました。此事は版毎に施した増訂に依り明かに之れを見ることが出来ますが、其後今日迄の間に於ける其程度は又々更に大なるものがあります。是全く江湖諸君の斯花に關する趣味の増進せられたる結果と又考が多年熱心努力の賜と申しても宜しかるべく、私共一同の感激に耐へぬ次第であります。

今茲に増訂を施すとは申したものの、私共素より淺才學理に疎く文辭に拙にして只多年父の意を繼ぎ業を襲ひ以て今日に至れる間に得た事柄を記入したに過ぎません。苟くば讀者諸君之を諒とし垂教の勞を乞ます本誌及我蘭菊をして益々大成完備の域に進ましめられんことを。

本誌發刊に就ては是々施淺野陽吉先生の厚き御同情を以て御援助下された事を茲に特記して感謝の意を表します。  
昭和八年二月馬尼刺輸出の蘭菊荷作りを了へて

廣樂園主人  
第二代 赤司喜次郎 謹識

目次

第一章 緒言……………(九)

第二章 久留米躑躅の別名……………(三)

第三章 久留米躑躅の起源……………(三)

第四章 新花栽培の始祖……………(三)

第五章 栽培家の系統……………(五)

第六章 明治維新後の経過……………(七)

第七章 花種品位の變遷……………(八)

第八章 外人の愛好……………(三)

第九章 久留米躑躅及び草月躑躅の爲めに受けたる弊國の光榮……………(三)

第十章 現今に於ける花種の大別……………(三)

第十一章 品位審査法……………(五)

第十二章 栽培法……………(四)

第十三章 繁殖法……………(七)

第十四章 病蟲害及び驅除法……………(五)

第十五章 促成開花法……………(五)

第十六章 久留米躑躅に就ての詩歌……………(六)

附 録

第一章 草月躑躅……………(六)

第二章 久留米草月……………(六)

第三章 大輪性躑躅……………(七)

第四章 アザレア・インデカ……………(七)



# 久留米躑躅誌

廣業園主 初代 赤司喜次郎 編述

次男 赤司辨藏 増補

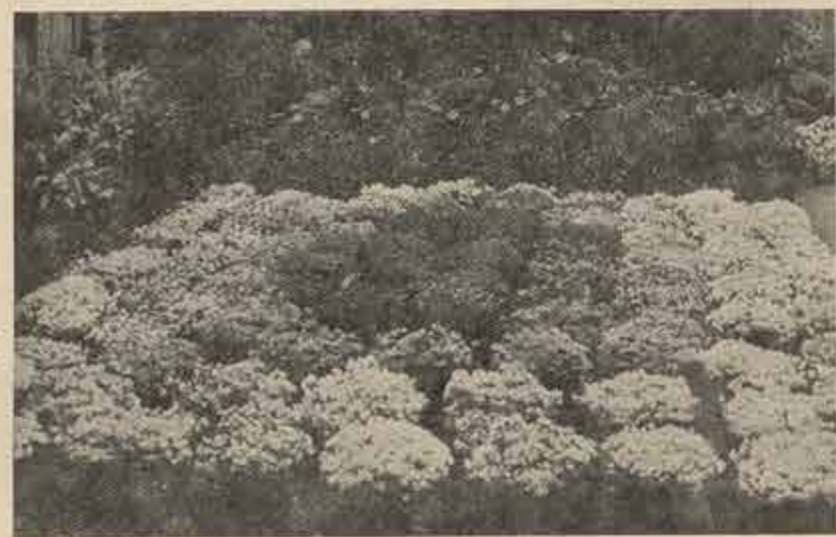
## 第一章 緒言

我久留米躑躅は普通霧島躑躅の改良進歩した種類でありますから性質至て強健であります。そして寒暖の風土に適し、栽培至て容易であります。花は紅、白、丹、紫、純、駁、濃、淡等千差萬別、其種類甚だ多く、又花形は單、複、大、小種々であります。其美麗なると變化の多きとは、他に比類がありません。開花期は四月中旬より五月上旬に至る間であります。而して花は一齊に開花し、無双の麗姿を呈し、能く久しきに耐えますので、或は庭園樹石の間に植栽、或は洋式毛氈花壇の栽植に用ひ、或は盆栽として室内を裝飾し、或は温養を以て開花を促し、切花盛花となし、或は路敷の贈答に用ひ、或は花壇に陳列して之を賞し、大にしては之を公園遊園等の地域に栽植し、又之れが開花せる稚苗を以て、人形、躑躅人形等の衣裳模倣其他種々の趣向裝飾を施して観客を引き、以て地方繁榮策の一助に供せらるゝ等其用途甚だ廣いのであります。殊に豊くも 昭和東代の

天長節の佳晨は、恰も最良全盛の満開季であります。其頃は櫻や桃は己に散じ、プリムラ・シネラリヤ、水仙、チューリップ、ヒヤシンス等多くの花卉亦何れかと云へば、満開季は既に過ぎ、見飽きたる感あるの時でありますのに獨り躑躅花のみは妍鮮麗美の觀を呈するので、室内に又廣闊に



植鉢の木苗園久留米久出産園整るせ開滿て於にヲニマ



作玉園久留米久出産園整るせ開滿て於にニトスが園米



花盛の園圃米留久

ります。巴に佛國ウキルモラン商會の如きは、其營業案内に久留米園の種子を掲載發賣しつゝあります。

天長節奉祝の裝飾には無比の適品であります、故を以て遠近の需要日を増加し、今や内地、臺灣、鮮滿支那、南洋等は申すに及ばず遠く南北亞米利加歐洲の各地へも輸出し、毎時非常なる好評を博し、益々前途の有望を認めつゝあ



形人島響園花

常非れさ僅に下の援後所役市北臺會業實北臺組防消北臺年五和昭 形人園圃 (産園整部全は料材) 形人園圃の園花櫻北臺るたし博を評好の

大正七年五月三日、米國植物學の大家でボストン、ハーバート大學の教授であるアーネスト・エツチ・ウイレルソン博士は横濱植木株式會社社長鈴木清吉氏と共に、久留米躑躅調査の爲め來園あり、時恰も躑躅の満開に際したので、博士は一見激賞措かず、「西洋躑躅は遠く及ばず、斯樹花を着くこと極めて多く、株固全く繁茂を以て蔽はれ、其色彩いづれも清麗麗美を極む。進歩斯の如くなる品種であるのに、又改良以來既に百有餘年の星霜を経て居るのに、未だ世界的の名花とならざりしは、寧ろ不思議である」と品評されました。以て斯花が深く米人の嗜好に適することを知られると思ひます。

博士は我久留米躑躅に就き、其淵源來歴より種類、栽培法に至るまで、最も詳細に質問し且つ記録し、併せて數種の寫眞を撮られました。蓋し躑躅に關する著述の資料に用ひらるゝものであつたでせう。

弊園の躑躅は畏れ多くも之れを

明治天皇陛下に献上し奉りて、御嘉納の光榮に浴しましたのを始と致し

大正天皇、皇后兩陛下にも又

今上陛下攝政御時代にも献納し奉り、何れも御嘉納の光榮に浴しました。且又東京大正博覽會に於ては宮内省御買上の恩命を蒙り、又閑院宮 朝香宮兩殿下には、花時弊園へ御奉臨親しく斯花御觀賞を委う致しました。其他各地博覽會共進會に出陳し、其の度毎に高賞を受領してゐます。弊園榮譽の程感謝に堪えません。左に躑躅に關する諸事項を記し、以て同好各位の參考に供せんと存じます。

### 第二章 久留米躑躅の別名

小島島、霧島躑躅、映山紅、以上は皆始祖版本會愛蔵の當時より用ひられたる名稱でありますが、錦光花は明治二

十八年五月、久留米の商賈吉村長平外二名相謀り

明治天皇陛下に献上出願の際命名した名稱であります。當時吉村氏等が花名を選び錦光花としたのは、最も強く美中の美を顯さんが爲めに、美中の美なる錦と光との二字を採りて、花に冠したまで、別に何等據る處はないやうであります。爾後販路の擴張に従ひ、久留米躑躅の名を用ひらるゝ顧客最も多きに依り、何時となく「久留米躑躅」が通稱となり、殊に明治三十六年第五回内國勸業博覽會に於て、弊園の出品にかゝる躑躅が二等賞を受領した後は「特産久留米躑躅」が普く通稱となつた次第であります。

### 第三章 久留米躑躅の起原

我久留米地方に於ける斯花の起原は、今を去る百四十餘年以前に在りまして、其栽培も一朝一夕の業ではありませぬ。百四十餘年の昔時、舊久留米藩に於ては既に斯花の流行が起りまして、或は士人の間に、或は町家に同好の人多く、遠く肥後、薩摩其他所々の山野より斯樹を採集し、之を園中に移植し、觀賞に供したのであります。當時は多く大株や古木を以て庭園を裝飾するに止り、其種類亦僅かに八九品あつたばかりであります。そして其花容色彩は自然生の種類ばかりで、今日の如き人工栽培の術は未だ開けませんでしたから、其觀や單純、其趣や素然、現今の如く花容色彩殆んど千差萬別、神妙の手腕ある畫工と雖も、容易に其美觀を描き出す能はざるが如きは、其の片影だも、其の當時に於ては之を見ることは出来ませんでした。

### 第四章 新花栽培の始祖

世上の事物、皆始は單純に起り、年所を経るに隨ひ或は經驗に因り、或は思考に依り、人智漸く開發せられ、初めて複雑を見るに至るが常のやうです。久留米躑躅の來歴も亦斯の通りで、其の初めは單に天然自生の花容色彩を觀賞

するの止む能はざるに過ぎませんでした。今日より百四十餘年前、我久留米に坂本元藏と云へる藩士ありて、始めて人工栽培を工夫し、新花を作り出すに至つたのであります。爾後我久留米露園は一に天然自生の花種に依頼したる單調の境地を離脱して、人工栽培花種複雑の境地に進み、紅、白、紫、丹或は淡或は濃、或は純或は駁、或は單或は複、花容色彩、多趣多様、其満開の際の如きは艶麗美装、或は牡丹を制し、或は薔薇を壓せんとするの観あるに至り、以て今日盛況の基を開いたのであります。

久留米露園栽培の始祖、坂本元藏氏は徳藩馬廻り役を勤め、掃原町五丁目に住し、當時同好の士に先んじて、早く既に露園露園の人工栽培を企て、其業を成功した斯花沿革史上特筆大書すべき偉人でありませう。

坂本氏は性頗る風流、夙に當時の流行であつた露園露園の栽培に着手し、年々歳々之れを愛賞したが、當時斯花の栽培は頗る幼稚で、只僅かに天然自生の八九種を見るに過ぎなかつたので、當時の花種は未だ以て斯花の愛賞に熱心なりしと云はんよりも、寧ろ斯花の愛賞に耽つたと評すべき氏の熱烈な嗜好を充分に充たすことは出来なかつた。此に於てか氏は竟に熱心工夫を凝らし、人工栽培に着手し、或は梅林寺(舊藩主の菩提寺にして市の西端に在り)に到り、或は高良山(山頂に玉唾宮あり市の東一里半餘なり)に上り寺庭社園に在る露園露園の種子を摘採採集し、苗床を作つて之を播下すること再三、之れを試みました。初年は春風秋雨、氏に酬ひず、其業全く徒勞に歸して、苗床の裡、一苗の影だも留めなかつた。氏は次歳又之を試みて又失敗し、失敗に失敗を重ねること數年に及びましたが、氏の熱心なる、屈せず、挽まず、前途の成功を期して又苗床に臨み、今や將に種子を播下せんとするの際、憐れ無情一陣の春風は、氏の掌上より種子を奪ひ去り、亦一粒を残さなかつた。流石に熱心なる氏も、此に至りて終に氣挫け心屈し、最早又播種しようとはしなかつた。然るに日を経て、氏は偶然庭内青苔の裏に、一種異様の發芽あるを發見し、仔細に檢すれば何ぞ圓らん、是は實に氏が宿昔の希望にして、數年の失敗に了りたる露園の實生であつたのであ

ります。前日氏が掌中より奪ひ去り、吹き散らしたる無情の春風は、茲に端なくも氏に向て播種の法を教授せる有情の恩師となつたので、氏は歡天喜地、之れを移植し、日夜之れを培養し、漸く播種の功を奏したのであります。嗚呼無情の春風は却て氏に播種の法を教へ、氏をして多年の宿望を達せしめ、茲に新花栽培の道を開いたのであります。

### 第五章 栽培家の系統

坂本元藏氏は熱心の極、偶然播種法を悟り、人工栽培の容易なるを知るや、公務の餘暇、熱心に新花の栽培に従事し、新花を出したので、斯花の面目一新し、花容色彩漸く巧を盡すに至り、世人の嗜好亦進み、同好の人日に多きを加ふるに至りました。然れども氏が人工栽培を發明した當時は、獨り新花を自家の秘藏とし、之れを他に分與するを好まず、自家の愛好を専らにする風習であつたから、氏の新花は容易に他に出なかつたが、氏の研究は氏が熱心と共に進み、氏が研究進むと共に新花年を追ふて加はり、時の新は今日既に珍とするに足らざるの觀あるに至つたので氏は漸く門戸を開き、之を同好の人に分與したのであります。そして先づ西尾與次右衛門、笠井理伸、山田市藏、竹井圓、三浦國衛、妹尾龜十郎等諸氏に傳はり、以て今日の盛を見るに至りました。坂本氏は嘉永七年五月十八日享年七十にして死去、墓は市内寺町妙正寺に在り、法名は誠忠院院日勇居士と申します。

西尾與次右衛門氏は京町六丁目に住し浪人奉行であつた。名花鳴海重は氏が丹精に依りて出来た實生新花でありまして當時坂本氏が愛賞したものであります。西尾氏は晩年に至り、愛藏の露園を石田與右衛門氏に譲つたと聞きます。

笠井理伸氏は掃原町二丁目の人で、露園御使番を勤めた人でありませう。山田市藏氏は掃原町二丁目に住し、竹井圓氏は京町一丁目に住し、三浦國衛氏は掃原町二丁目に住し、三人共に同じ馬廻り役であつた。

妹尾龜十郎氏は橋原町一丁目の人にして、居合指南番を勤め、老年に至り外十二軒屋（現今市内津幡今町）に移轉し、明治二十八年九月八十有三の高齡にて死去せられた。氏は性頗る風流にして、鄙陋を受するの外、古梅樹の盆栽仕立に妙を得た。其技は其末子藤井百助氏に傳はり、現に弊園秘蔵の盆梅は、惣て氏の剪截に係るものであります。右諸氏は殆んど坂本氏直系の門人とも云ふべき栽培家であります。尙前掲諸氏と前後して斯花栽培に功勞あり、斯花の沿革史上特筆すべき左の諸氏があります。

安西茂八郎氏は橋原村（現今市内東橋原町）の人、藩校明善堂禮儀方を勤めた。氏は我園圃改良に就き、坂本氏に亞ぐ熱心家で、肥培の方法に、又斯花の育成に幾多の研鑽を重ねた。加ふるに其母堂は老後豊澤として之を補佐するを以て、唯一の厚業とされた程にて、注意至らざるなく、若し多數盆栽の内、植土に過氣の溜滞を來したるものあれば晴天の日、鉢植の儘横に倒して鉢の底部及側面に日光を受けしめ、其陽熱に依り、鉢内の乾燥を圖つた上の事である。該法は頗る迅速且煩勞多く爾後之を行ふものはありませんが、當時氏が熱心の度を窺ふに足るのであります。故に毎年開花の美、他に勝り、且つ名花新青海、木摘花、安西高時繪等は氏が實生の優種で、今に至るまで新青海を安西青海、木摘花を安西木摘花と稱する人があります。而して氏は晚年に至り、愛育の鄙陋全部を吉和道常氏に譲りました。

吉和道常氏は日吉町に住した藩士であります。目下日吉町齒科醫吉和國雄氏の先考にして鄙陋改良の熱心家でありました。

小城庄藏氏は橋原村の人にして舊藩士、松屋次助氏は姓木村氏、通町三丁目の人、世々藩士の御用菓子業とした。若松屋佐平氏は新町の人、姓を山口と云ふ。石田右與衛門氏は舊藩士にして京町の人、柳謙次氏は舊藩儲者京町の人であります。

以上の諸氏は熱心なる斯花栽培の研究家でありました。そして毎年花時には同好の人々相會して新花會を開き、品位の優劣を批判し、栽培の巧拙を品評し、斯花栽培の優良を競ひしかば、一新又一進、年を追ふて珍奇の新花を加へ幾年ならずして花品二百有餘種の多きに及び、今日の鄙陋は其當時早く已に久留米の特産たる資格を具へたのであります。然れども當時弊く之を極するを約し、一校だに限り他に出すを許さず、以て明治維新の際に及びました。

### 第六章 明治維新後の經過

明治維新の際國事多端、世態亦一變して、風流韻事は頗る衰微し、斯花の流行も漸次に衰えまして、前章に述べましたやうな新種の鄙陋にして遂に枯凋滅亡に歸した種類決して少くありません。

夫れ世上の事一盛あれば一衰あり、陰陽りて陽に復するは自然の理であります。鄙陋の盛衰も此理に漏れませんでした。維新後は年月を経るに従ひ諸般の事物中には青春一陽の來復を見たるもの多かつたが、鄙陋花は獨り久しい間、常に秋風落葉の感がありました。併し明治二十四五年の頃に至り、社會一般國勢の勃興と共に鄙陋花も其運命を恢復し、漸く舊時の盛況を見るに至りました。然れども當時は尙一地方の觀賞に止まり、一般世人の間に、西歸久留米の地に此の珍奇の美花あるを知るものは、實に少かつたのであります。偶々商估數名、之を大阪に搬出し、公衆の觀覽に供せしに、非常の好評を博し、始て汎く世に知らるゝの端緒を開きました。爾後駁々として年一年に隆盛を來たし、今日の盛況を呈するに至りました。

前章に述べました斯花栽培の諸大家に次で熱心なりしは、鎌倉屋岡本民治、吉田煤長、牛島濟民の諸氏でありましたが、今や皆故人であります。又右牛島氏と提携し非常の熱心を以て斯道に貢獻された人に中野勝次郎氏があります。氏は今尙豐稔、多くの名花を出されました。蓋し牛島中野の二氏は、斯花の進化に大功績ある人々であります。

又此の二氏と比肩し、斯花栽培家として、其功勞の稱すべきは小城八次、吉村利平、吉村長平、淵上彌八、藤山廣次、中村昌三、柳直矢、中園村次、田中熊太郎（以上九氏は故人）土月熊雄、竹島庄太郎諸氏であります。各家出す處の新花、今や増殖して新珍花とは稱すべからざるも、其優逸なる花容色彩は、今後永劫に没却すべからざるものであります。而して目今は斯花の流行と共に同好の士も頗る多く、又專業若くは副業として栽培するもの日に増加し、殆んど枚擧に遑らざる程であります。

第七章 花種品位の變遷

我久留米地方は地味氣候共に植物に適し、各種の草木能く生長茂茂し、四時花を見ざるなく、本邦の名花として數へらるゝ春の梅、櫻、牡丹、夏の薔薇、芍藥、玉蘭花、秋の七草、冬の菊其他名ある花卉は皆殆ど我久留米地方に其艶を競はざるなく、其美を争はぬものはありません。併し是皆本邦通有の名花で、敢て我郷特有の名花として之を他に誇るに足るものではありません。然るに幸に我郷に獨獨栽培の業開けましてから茲に百數十年、栽培の業非常に進歩し、花種實に千紫萬紅、百花の群に伍して一種別に春を成す趣がありますので、我郷斯花を得て、斯花獨り我郷特有の名花として、他に紹介するを得る心地せられます。唯客某氏會て斯花を詠して「米城第一是斯花、紅紫群中獨勝誇」と云はれたのは、誠に斯花の通評とや申すべき。

久留米獨獨栽培の始祖坂本元殿氏及び其時代の熱心なる栽培家に依りて栽培せられた新花の數已に二百餘種に及びたることは前章に記した通りであります。當時已に新花を品評し、之を木版摺りにし、同好の士に分ちしものと見え、故小城八次氏は、坂本氏時代の同好者の手に成つた左の如き木版摺り一枚を蔵して居りました。是れ蓋し我久留米に於ける最初の獨獨花品評であります。

小霧島名寄せ角力結び

千秋萬歲大入叶寄元久留米住版元久留米中澤	方西	蒙	方東
	同同同同同前小關大	免御	大關小前同同同同同
	同同同同同頭結脇關	行司	楊裾高浮白初嵐鶴吹
	●●●●●	桐	●●●●●
	兒雪笑郭吳玉玉大位	壺	貴濃の詩む元羽
	の之芙和之	葛	妃糸繪瀬妙結山重形
	遊駒顔公服臺蓉錦紐	頭取	暮早雜今夕朝式富令志爪初卷
	色都二雲蓬櫻染稻富雪花初	鳴	の乙芳緑部のの
	見無小の士の狼	誰	雪女雀野岡り櫻峰町里折音精
	●●●●●	角	佐萩麻花井浦蒲住千峰玉雲古
●●●●●	勸	野の手の代の金の	
●●●●●	進	雪戸内浅里香り江曙雪縁上綱	
●●●●●	瑞	朝芳舞紅石女三浦富夕勢名村	
●●●●●	陽	野實白吉士の古	
●●●●●	籬	霜山鶴珠精髮野雲雪空日屋雨	
●●●●●		松今武風繪晴平不宮梅	
●●●●●		の捨り	
●●●●●		雪岡陵折合山ス戸野枝	

備考 番付の中●印は其當時、留花と稱して、他に分種を禁じたる種類であります。

右の品評成り、之を印刷したる後、更に其時代に作り出されたと云ふ顯著の花名を聞くに左の通りであります。

(●印留花)

- 窓の内 ●窓の月 ●田子の浦 ●初潮山 ●青海 ●乙女 ●浪の華 ●小倉山 ●龍田川 ●小遊氏
  - 人丸 ●暎の雪 ●西施 ●美人醉 ●更衣 ●御所櫻 ●春霞 ●霧の海 ●玉牡丹 ●紅葉重
- 爾來今日に至るまで、新花の品位即ち同好者間に於ける定評の變遷を記すれば左のやうであります。

坂元蕨氏撰	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽
天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽
天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽
天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽
天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽
天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽
天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽
天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽
天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽
天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽	天關高 遺貴の 元むの 羽

前記坂本氏撰定の第一は其年代不明でありますが、第二の東方大關高砂、西方大關樓司の各一列は、蓋し嘉永年間  
の撰定に係るものと思はれます。而して明治二十七年以後の撰定は、概ね登利者の手に成れるもので、我田引水の弊  
多く、殆ど歸準する所がありませんから、弊園は其類を避け、一等、二等、三等及び特別の四階級に區分し以て今日  
に及んで居ります。

### 第八章 外人の愛好

現今我久留米郷の愛好は、内外に普く、販路亦内外に涉りまして、支那、南洋、歐米に及んで居ます中にも、米  
國ボストン、ハーバート大學教授ウエルソン博士が、大正七年五月三日弊園に來り、久留米郷に就き熱心に種を調  
査を遂げ歸國されし事は、第一章に述べました通りでありますが、其翌年三月二十日付を以て「米紙に現れたる米人  
の郷國觀」と題し、在紐育青陵氏が、福岡日日新聞に通信された一文は、偶然にも、ウエルソン博士が、弊園視察の  
結果及び其際博士が持ち歸られた弊園の久留米郷着米後の消息が、明瞭に記録され、且又米人の郷國觀が分明であ  
りますから、其の記事を左に掲げます。

紐育からボストンに遊びに來た。此地は米國獨立戦争で眞先に旗上りをしたといふので有名な所で文藝の中心を  
以て目せられ米國で最も權威ある大學と稱せらるゝハーバート大學も此處にあるマサチューセツツ灣に臨みたる東  
海岸第二の貿易港で商業も盛に風景亦頗る善い。  
余(青陵氏)は市中を散策してボストン、イヴニング、トランスクリプトといふ夕刊新聞を買ふて見たら意外に  
も我郷國の記事が出てゐる。  
赤前喜次郎氏と彼の久留米郷國

と題し大々的に久留米蘭園を紹介され赤司氏の寫眞と名刺(廣葉園主赤司喜次郎、福岡縣三井郡重久留米と記せるもの)並に久留米からボストンに持來された蘭園の盆栽の寫眞版が掲載され之がために殆ど二頁の半以上を割いてゐる。赤司氏の寫眞は日本の新聞によれば四段×キ位の大きさである。蘭園といふものは米國には以前はなかつた。今は大分見るようになった。米人の間に非常な珍重されてあるが何處から來たものかといふやうな事に至りては多くの人は知らぬ位、新聞にどういふ記事が出たならば此の草紙た蘭園は元日本から來たもので南日本の久留米といふ所が其の名産地であることを知るであらう。

此記事はボストンのアールド植物園の副支配人ウキルソン氏が日本に渡航して久留米に行つて此蘭園を齎し來たことを書いたもので可なり長い記事であるが左に其の大意を譯載する米人が如何に此久留米蘭園を見つゝあるかといふ事は前者に取りて多少の興味なきに非ずと思ふ。(以下譯文)

「次の週刊ボストンのアールド植物園に於て開催せらるゝ植物展覽會を訪ふものは同園副支配人ウキルソン氏に依りて持來されたる久留米蘭園の美事なる陳列を見るであらう。此蘭園といふものは以前此國に極く僅かあつたのみで眞に花を愛好する人の外には知られてゐなかつた。

往年桑港に開かれたる巴奈馬太平洋博覽會に於て此蘭園が少し陳列されてあつた、其後一九一六年ウキルソン氏の勤めにより北イースリンのジョン・アメス氏が日本の横浜から僅少の蘭園を輸入した。之れは米國の東方の州に蘭園の持來された始めである。

此蘭園はよく成長し豊富なる花を持つやうになつた、而して之はアメス氏の風雅なる財産の一つとなつて氏自身毎に花を愛する友人等を喜ばした。マセチニセツツの園藝會社により發行された報告書に於て植物展覽會の蘭園の事は詳細に記載されてある。此展

覽會に來て見る人は花の形や何かに就ては十分の品評を下し能はぬかもしれぬが、其の眼ざむる許りの美しさに就ては無感覺なる事が出来ぬであらう。此の蘭園の葉と蕾とは完全に普通の蘭園のやうに畸形のものや不格好のものはない。花は純白からバラ色、淡紅、朱色、灰紫色等種々なる色に迄變化する中には花許りで葉の全く見えないものもある。

一九一七年アールド植物園に於て蘭園の充分なる研究をなすべく決定した。即ち何處でも蘭園の自然に生てゐる山とか又は昔から蘭園の栽培されつゝある都市とかいふものを訪ふべく遠征隊を派する事になつた。ウキルソン氏に取つては實に得難き機會で氏は一八八八年蘭園の産地たる日本に渡航した。而して横浜養樹會社の社長たる鈴木氏と同伴蘭園の完全なる開花を見るべく久留米に赴き五月三日同地に着した。久留米は九州といふ島にある都會で東京から西南八百哩ある。

久留米着後のウキルソン氏は早速蘭園の花を見るべく出かけた、其花の美しさは人を恍惚たらしむる許りで赤司氏の花園は眞の仙境であつた。米國や歐洲の花の愛好者は斯る美に接することが出来ぬことを思ふてウキルソン氏は絶えず大息した蘭園は大抵二尺位の高さに仕立てられてある。而して花の大きさは僅一寸から一寸の四分三位のもので小枝の先に密に咲いてゐる強て缺點をいへば葉が見えないで花の数の餘りに多いことである。

久留米に於ける蘭園の中心地點は赤司喜次郎氏の花園である。氏は此蘭園の栽培と改良に向つて殆ど四十年の長き歲月を費した。此老練の園藝師ウキルソン氏に向つて蘭園の植木を提供した。悉くそれを手放すといふ事になると恰も自分の古い友人にでも別れる氣がするやうであつた。ウキルソン氏は此花園に於て最も善き種類四十三を選み都合百二十五の植木を買取る事にした、買受けに就ての交渉は可なり長くかつたが結局之を買取り熟練なる日本の運送店に托した。之が一九一九年四月ボストンのアールド植物園に到着して荷がほどかれ



たが長き間積載されたに拘らず少しの損じもなく能く生育してあつた。而して今日に於て之は完全なる薔蘭の良本となつてゐる。

三四

赤司氏は薔蘭に就ての歴史をウキルソン氏に話した。久留米に於ける薔蘭栽培の元祖は百年前其の地に住んだ坂本元藏といふ人であつた(中略)元には角坂本氏は色々な種類を栽培し其内に「吾妻鏡」と名付けられたるものもあつた。此吾妻鏡といふ坂本氏の栽培したる薔蘭は五年の星霜を経過したるに拘らず今尚ほ生きて開花しつゝあるウキルソン氏は之を買はんとしたが之は買へなかつた。金の多少に拘らず赤司氏は之を手放すことを欲しなかつた。赤司氏は坂本氏の死後彼の集めた所のものを凡て譲り受けたのである。而してかの巴黎萬太平洋の博覽會には彼の持ちたる種類の内から僅に十二だけ出陳されたのであつたが、赤司氏は此の博覽會に於て金の賞牌を得た(中略)外國に輸出せらるゝ薔蘭は豫ねて大阪附近で栽培せらるゝものであるが、ウキルソン氏は久留米よりの關途此地方の花園をも観察した、併し久留米で見し如きものは種で花は多く平凡なるものであつた。本場はどうしても久留米で久留米薔蘭の美に及ぶものはない(一九一九年三月二十日發)前記の記事に據りますれば久留米薔蘭に對する米人の賞識が如何に熱烈なるかを、よく知ることが出来ると思ひます。

### 第九章 久留米薔蘭及皐月薔蘭の爲めに受けたる弊園の光榮

一、明治三十五年十二月、故小松宮殿下御在世の折り、薔蘭を久留米に駐め給ふや、弊園の薔蘭を愛し給ひ、數百の苗木御買上の榮を辱ふし、三島御別邸へ御送付申上げました。左記は當時宮家々從坂井孝氏より報じ越された書簡であります。

拜啓愈御多祥の段奉賀候陳者先日錦地帯在中内藤平次郎氏を以て御送付方御願申上候薔蘭苗木早連三島御別邸へ宛御發送被下候處去る十四日無事到着致候旨同御別邸より通知越候に付半御休御被下度候付ては該代金廿八圓五錢也別紙郵便爲替を以て御送令申上候條御入手被下度候御入手の上は受領書御送付被成下度此段御通知奉得貴意候 敬具

十二月十七日 小松宮家從 坂 井 孝

一、明治三十九年十一月小松宮殿下久留米へ行啓の際、弊園薔蘭新花二十種及光遠木二本を獻じ、御嘉納の榮を辱う致しました。右の二十種は三十五年御買上の榮を蒙りたる後、更に發生した良品であります。

二、明治三十九年舊久留米藩主有馬伯爵當地へ御歸省の際、弊園の薔蘭を買上げ之れを北白川宮家へ献上せられしに殿下には頗る御満足にて妃殿下御手づから御撮影の寫眞を下賜せられたるを、伯爵家々有馬秀雄氏より左の書簡を添へて回附せられました。

謹啓陳者貴園倍々御隆盛不堪慶賀之至候。惟昨秋御特産の霧島薔蘭を北白川宮へ献上致候處今春満開の折 妃殿下御手づから御撮影被遊一葉写生へ御下賜相成候に付御許可を得爲記念貴園へ贈呈致候間御受納被成度候也  
明治四十年九月十五日 草々敬具

有 島 秀 雄

赤司廣業園主 赤司喜次郎殿

一、明治四十四年英國皇帝祝賀式へ御参列の爲め、東伏見宮殿下關門御通過あらせられし時、孝喜次郎奉同し、前田正名翁を経て、薔蘭二盆を獻納し御嘉納の榮を蒙りました。尙御隨行の乃木、東郷兩閣下へも献上せしに、鄭重な

る謝状を贈られました。

一、明治四十五年三月伊東元帥閣下を経て、幣團の郷國中最優秀なる高砂、左近、彌濃の糸の三鉢を宮廷に献上し奉り、御進達の榮を蒙りました。因て當時の宮内大臣御進達書に拜寫し之れを左に掲げます。

一久留米郷國玉作益我參鉢

右福岡縣三井郡國分村大字東久留米赤司喜次郎より

天皇陛下へ獻納願出之趣を以て傳獻被致候に付

御前へ差上候此段申入候也

明治四十五年四月二十三日

元帥 伯爵 伊 東 祐 亨 殿

宮内大臣 伯爵 波 邊 千 秋

一、大正二年四月前田正名翁、皇子御別邸に御靜養中なりし有栖川大將宮殿下を奉伺し、幣團の郷國末摘花、新青海の二鉢を献上せらる。殿下には殊の外御意に叶はせられ、其處に留置けとの御詞ありしと拜聞致します。我培養の花并殿下の御納中を慰め奉るを得しは望外の光榮とする所であります。

一、大正三年四月宮内省内苑通朝野子爵閣下を経て、幣團の郷國中特に優秀なるもの左七鉢を厭納して天覽に供へ奉りました。

一白 鶴

一雲の上

一華波湖

一花 遊

一羅生門

一第二夕陽

一鶴の羽重

右獻納の七鉢は宮内大臣波多野男爵閣下より御進達の榮を辱ふしました。當時宮内大臣御進達書を拜寫して左に掲げます。

一、久留米郷國花並我七鉢

右福岡縣三井郡東久留米赤司喜次郎より

天皇

皇后兩陛下へ獻納願出之趣ヲ以テ傳獻被致候ニ付

御前へ差上候此段申入候也

大正四年七月五日

宮内大臣男爵 波 多 野 敬 直

子爵 伯爵 逸 人 殿

一、大正三年春東京大正博覽會に於て幣團の郷國宮内省御買上の恩命を蒙りました。

一、大正四年五月十二日 関院宮殿下特別の御恩召を以て幣團へ御奉進ばさる。其際郷國參鉢、カラヂエナム貳鉢献上願出、御嘉納の光榮を蒙り、且草月郷國御買上の恩命を辱う致しました。

一、大正五年十一月十四日陸軍特別大演習の際、考喜次郎大本營に御召出の恩命を蒙りました。

一、大正六年五月十七日 朝香宮殿下幣團へ御奉進あらせらる。同時に郷國玉作益我献上願出、御嘉納の光榮に浴しました。

一、大正六年六月二十七日 考喜次郎に對し縁段裏京御下賜、同七月十六日福岡縣廳に於て傳達式舉行せられました。

一、大正八年十一月二十日 関院宮殿下再び幣團へ御奉進ばさる。

一、大正九年四月

今上陛下皇太子御時代に久留米郷園及び春日郷園献上、御嘉納の光榮に浴しました。

一、大正九年十一月 久邇宮家より郷園御用命を蒙る、其際玉作久留米郷園盆裁献上、御嘉納の光榮に浴しました。

一、大正十一年二月 皇后陛下に郷園献上、御嘉納の光榮に浴しました。

一、大正十一年四月 今上陛下攝政御時代に郷園献上、御嘉納の光榮に浴しました。

一、大正十二年五月 久邇宮家より再度郷園御買上げの恩命を蒙りました。

一、大正十五年十一月二十九日 朝香宮殿下再び郷園へ御奉臨遊ばさる。

一、昭和五年八月 秩父宮殿下久留米御成の際、郷園及び筑紫石楠献上、御嘉納の光榮に浴しました。

一、昭和六年十一月 李王殿下郷園へ御奉臨あらせらる。

一、昭和七年二月 李王殿下再度郷園へ御奉臨あらせらる。

尚繁園の光榮に關する事實を擧ぐれば左の通りであります。

一、大正三年春東京帝室博物館へ郷園寄贈、野野館長より鄭重なる謝狀を寄せられました。

一、大正四年春、南滿洲鐵道株式會社總裁中村男爵閣下よりの急遽御用命に依り、生開の郷園三十三鉢を調達して送りましたのに、鄭重なる謝狀及び室内裝飾の寫眞を寄せられました。

一、大正六年四月東京市主催日比谷公園郷園陳列會に出陳し市長より鄭重なる謝狀を寄せられました。

一、大正六年六月九、十の兩日東京帝國大學理科大學教授藤井博士御來國の際呈上せし郷園に對し、大學總長山田博士より左の謝狀を寄せられました。

左記の植物本學へ寄贈相成正に領致御厚意深謝の至りに候即本學に於て之を學問の資料に可供養也  
大正六年六月二十日  
東京帝國大學總長理學博士男爵 山田健次郎 叩

廣樂園主 赤司喜次郎 殿

一山 郷園 參種  
一草月郷園 五種 以上

一、大正六年十二月十一日南滿主伯爵有馬家より御紋服拜領  
又繁園は各博覽會、共進會等に於て左の通り賞牌及び賞狀を受領致しました。

一、二等賞牌 明治三十六年第五回内國勸業博覽會(大阪)

一、進歩銀牌 明治四十年全國五二品評會(京都)

一、謝 狀 明治四十三年九州沖繩八縣聯合共進會(福岡)

一、一等金賞 大正二年久留米郷園品評會(久留米)

一、二等銀賞

同 上

一、金 牌

大正三年東京大正博覽會

一、名譽金牌  
大正三年水天宮七百年記念勸業共進會(久留米)

二、一等金牌  
大正四年九州沖繩勸業共進會(福岡)

一、金 牌  
大正四年(西曆一九一五年)桑港萬國博覽會(米國)

一、謝 狀  
大正五年沖繩勸業共進會

一、一等褒賞  
大正六年福山市制記念全國特産品博覽會

一、一等賞  
大正六年福岡縣三井郡農會主催奉月郷國品評會

一、感謝狀  
大正七年九州沖繩勸業共進會(福岡)

一、一等賞二點、二等賞三點、三等賞三點、四等賞三點、計十點  
大正七年福岡縣三井郡農會主催奉月郷國品評會

一、一等賞

大正八年福岡縣三井郡農會主催奉月郷國品評會

一、一等賞  
大正九年福岡縣三井郡農會主催奉月郷國品評會

一、金 牌 (久留米郷國)

一、銀 牌 (奉月郷國)

一、一等賞  
大正九年平和記念東京博覽會

一、一等賞  
大正十二年福岡縣三井郡農會主催奉月郷國品評會

一、二等賞  
大正十三年福岡縣三井郡農會主催奉月郷國品評會

一、記念狀  
大正十三年東宮殿下御成婚奉祝萬國博覽會參加五十年記念博覽會(京都)

一、一等賞  
大日本園藝組合主催園藝品之評會(東京)

一、二等賞  
大正十四年福岡縣三井郡農會主催奉月郷國品評會

一、感謝状

昭和二年福岡市主催東亞勸業博覽會

第十章 現今に於ける花種の大別

久留米錦鶏花の品位變遷の概要は、第七章に於て述べました通りであります。現今に於ては、栽培法の進歩した  
ので、花種大に増加し、隨て花容花色共に多種多様に上り、詳細に類別し難き感がありますけれども、大別すれば約  
左の八種に屬します。

(い) 花 容

- (一) 猪 口 咲 花瓣潤大にして瓣端圓く猪口状をなすもの 例花 美人醉
- (二) 劍 咲 花瓣狭長にして尖りたるもの 同 難波湯
- (三) 並 咲 右二種の間なるもの 同 玉の裳
- (四) 二重の猪口咲 猪口咲の二重咲 同 九 重
- (五) 二重の劍咲 劍咲の二重咲 同 新 青 海
- (六) 二重の並咲 並咲の二重咲 同 高 砂
- (七) 葉 咲 猪口咲、劍咲、並咲の別なく總て二重咲にして外葩の伸び短く内葩の周圍に葉を掛けた  
るが如きもの 同 三 權 紋
- (八) 一 本 眞 雄蕊の發育不充分にして花の筒底に隱着し雌蕊一本のみ充分の發育をなしたるもの、此  
種の花は一重咲に多い 同 初 被

以上八種の内各種大、中、小輪の別があり、又中間の花形をなすものがあります。

(ろ) 花 色

花色は白、紅、桃、丹、鶯、紫、青白、醇白、紋等にして是亦濃淡變化限りなく、一々筆紙に盡し難し、目下繁園  
にて栽培しつつある種類の花名を記すれば、左の通りであります。其の中の○印は殊に好評を博せる品種であります

- |         |               |         |                    |
|---------|---------------|---------|--------------------|
| 新 常 夏   | ○白地紫紋二重大輪     | 朝 霞     | ○白地紫紋二重大輪          |
| 以 呂 波 山 | ○白地紫紋一重       | 神 橋     | ○白地紫紋二重大輪          |
| 思 の 空   | ○紫一重半輪高脚      | 不 知 娘   | ○淡紫色一重半輪大輪         |
| 蝦 夷 錦   | ○桃白に上々本紅紋二重大輪 | 吉 見 ケ 嶽 | ○桃白に上々本紅紋一重大輪      |
| 丹 前     | ○丹色白二重        | 夕 暮 草   | ○桃色に少しく紫白を帯び二重半輪大輪 |
| 緋 之 司   | ○濃紫社一重大輪      | 發 心 櫻   | ○淡紫底白一重大輪          |
| 柱 花     | ○淡紫色一重半輪      | 初 音     | ○淡紅一重半輪大輪          |
| 思 窟     | ○紫一重          | 若 菜     | ○丹色一重丸形大輪          |
| 櫻 重     | ○紫社二重         | 富 士 旭   | ○丹色一重丸形大輪          |
| 常 夏     | ○白に紅紫紋一重大輪    | 春 乃 卿   | ○丹色一重丸形大輪          |
| 野 田 用   | ○紫一重          | 見 返 り 櫻 | ○淡紅紫紫しく白し一重開る露露    |
| 三 橋     | ○白に丹紅紋高脚      | 九 重     | ○淡紫底白一重            |
| 左 近     | ○淡紫底白一重大輪     | 長 業     | ○紫底白一重大輪           |
| 酒 中     | ○丹紅底白一重大輪     | 百 花 撰   | ○淡丹紅少しく桃色を帯び二重大輪   |
| 綾 錦     | ○白地紫紋二重大輪     |         |                    |

一 天 淡黄色一重一本真  
 小 町 淡紅底白一重中輪  
 雛 丹色一重最大輪  
 麻 耶 人 〇濃紫一重  
 古 代 白に黒紅紫紋二重  
 旭 龍 黒紅紫長條二重又は黄掛大々輪紫長條青品  
 唐 錦 淡色地丹紅紋一重大輪  
 宮 春 株淡紫底白紅紫紋入一重  
 錦 春 〇丹色地丹紅紋一重大々輪  
 大 位 〇雪白に上本紅紋二重大々輪  
 筆 司 〇鮮桃色二重大々輪  
 御 旗 〇雪白地に紅紋一重大々輪  
 日 冠 〇濃紅一重大輪一本真並頭白く見榮あり  
 〇上紫一重大輪  
 辨 財 〇丹紅底白一重大輪  
 相 生 〇淡紅二重大々輪  
 春 葉 〇濃紫底白一重  
 小 葉 〇紫一重一本真  
 櫻 海 櫻色一重大輪紫の高脚  
 大 子 〇白地に紫紋獅子掛大々輪  
 敦 盛 鮮桃色二重大々輪

筆 止 〇紫掛る鮮桃色二重大々輪  
 武 藏 丹色一重最大輪  
 不 可 思 議 丹紅底白一重一本真  
 大 鱗 鰐色底紅二重大輪  
 二 等 品  
 高 破 〇淡紅一重  
 春 妻 〇淡紅二重大々輪  
 末 鏡 〇濃本紅一重  
 雅 花 〇鮮紅一重  
 騷 鴻 〇丹紅底濃紅二重  
 今 猊 〇濃々紅二重  
 〇濃紫一重  
 司 濃 〇濃紫一重  
 裾 濃 〇濃紫一重  
 位 〇濃紫二重大々輪  
 幕 〇雪白一重大輪  
 玉 紅 〇濃紅一重  
 〇濃紫一重  
 雲 井 〇濃紫一重  
 十 八 公 〇濃紫一重  
 八 公 〇濃紫一重  
 美 人 醉 〇濃紫一重

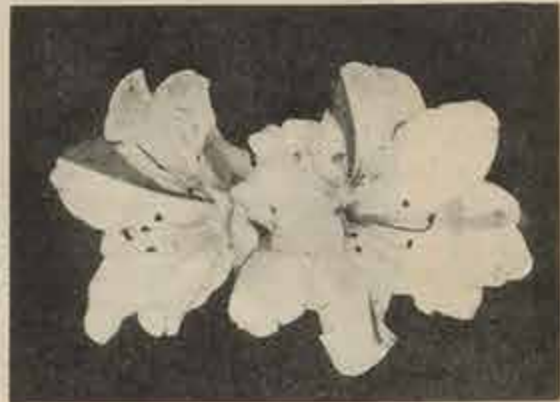
新 薄 雲 〇雪白に薄紅薄入二重大輪  
 鳳 凰 淡色地紫紋一重  
 水 晶 流 極雪白一重有光  
 君 代 〇濃紅色白一重大花  
 〇濃紫一重  
 小 城 〇濃紫一重  
 御 山 丹紅底白一重大輪  
 殿 山 淡紅に紅紋入一重長花並殊に白くして長し  
 〇濃紅一重  
 大 和 櫻 淡紅紫一重大輪  
 數 鳥 淡紅紫一重大輪  
 吉 野 山 丹紅底白一重  
 〇紫掛る緑色一重白並  
 車 返 〇淡紅底白一重大輪  
 吉 野 櫻 丹紅一重大輪  
 萬 歳 丹紅一重大輪  
 泉 川 〇淡紫底白一重大輪  
 〇淡紅一重大輪  
 春 晴 丹紅一重大輪  
 大 空 淡紅瓜白に紅紋一重  
 三 光 淡丹色底白一重大輪  
 〇濃紫二重大輪花形端正  
 呂 山 雪白一重  
 大 内 〇雪白一重大輪  
 白 鶴 〇雪白一重大輪  
 松 雪 〇雪白一重大輪

薄 縁 〇株淡紫底白一重大々輪  
 園 〇淡紅二重大輪  
 綾 媛 〇鮮桃色一重倍長形  
 浮 橋 淡紅紫一重大輪  
 亂 曲 濃紅一重  
 〇濃紅一重  
 舞 袖 白に紅紋一重  
 〇紫掛る淡紅一重  
 〇濃紅一重  
 〇雪白一重  
 新 雪 〇濃紫一重  
 参 等 品  
 若 楓 〇鮮紅一重大輪  
 〇濃紅二重大輪  
 岩 鏡 濃紅紫一重一本真  
 初 被 紅紫一重  
 綾 冠 〇雪白一重長花  
 養 老 〇鮮紅一重大輪  
 鳴 海 〇濃紅一重大輪  
 後 出 通 〇濃紅一重大輪  
 〇濃紫一重大輪  
 新 尾 上 〇濃紅一重大輪  
 日 出 〇紅一重

此花 錦雀 錦雀 錦雀  
 此花 錦雀 錦雀 錦雀  
 此花 錦雀 錦雀 錦雀  
 此花 錦雀 錦雀 錦雀

昭八 錦都 春清 霞  
 昭八 錦都 春清 霞  
 昭八 錦都 春清 霞

加賀村衣衣



(木) (錦)

川賀村衣衣

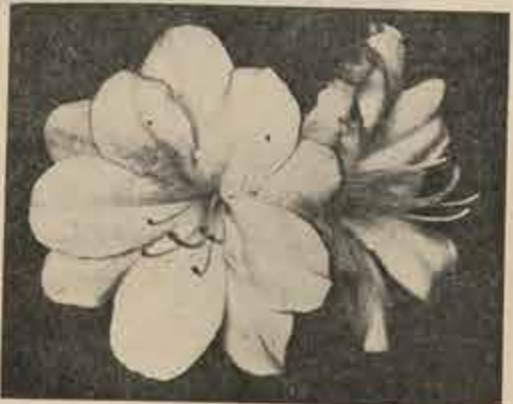
川賀村衣衣  
 川賀村衣衣  
 川賀村衣衣

菜君通赤初春



(加) 茂

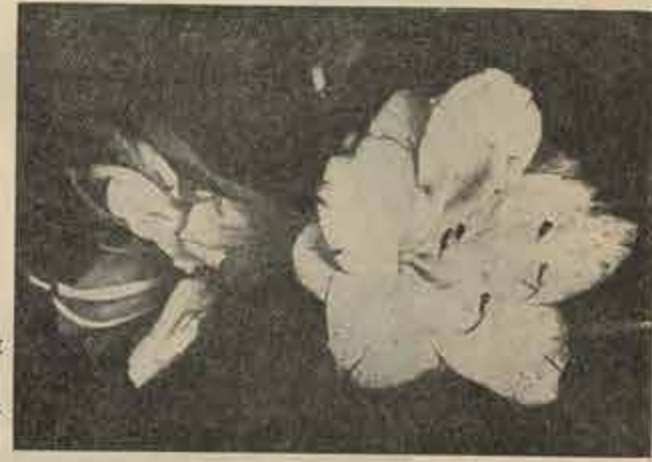
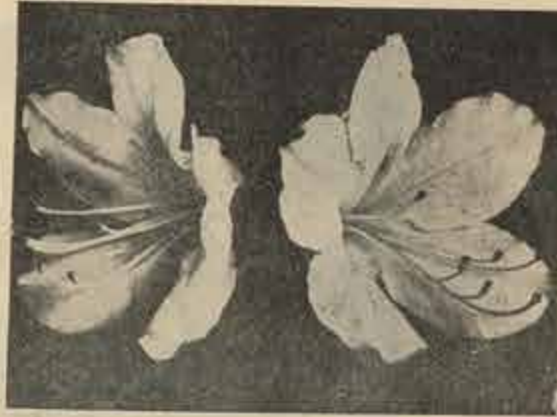
平惠町錦櫻



(舞) 衣

平惠町錦櫻  
 平惠町錦櫻  
 平惠町錦櫻

志賀



三八

梅王

種或紅梅色底雪白一重大大輪

種或紅梅色底雪白一重大大輪

種或紅梅色底雪白一重大大輪

種或紅梅色底雪白一重大大輪

種或紅梅色底雪白一重大大輪

種或紅梅色底雪白一重大大輪

種或紅梅色底雪白一重大大輪

種或紅梅色底雪白一重大大輪

種或紅梅色底雪白一重大大輪

種或紅梅色底雪白一重大大輪

種或紅梅色底雪白一重大大輪

種或紅梅色底雪白一重大大輪

種或紅梅色底雪白一重大大輪

種或紅梅色底雪白一重大大輪

種或紅梅色底雪白一重大大輪

白黄錦  
白黄色地丹紅紋一重八重咲交ぜ大々輪花  
輪大  
白地丹紅紋一重大大輪  
色形別大  
種或紅梅色底雪白一重大大輪

志賀の梅新  
錦旭園  
のの  
川鶴桃

種或紅梅色底雪白一重大大輪花形大  
色形別大  
淡紅に紅紫入一重大大輪色形優美  
紫赤る淡々紅一重大大輪色形優美  
白黄地丹紅紋一重大大輪花形大

右は何れも一目瞭然の品種であります。類似品及び品種未定の新花は略しました。

### 第十一章 品位審査法

久留米園圃の花品審査は、凡そ左の諸項に準拠します。

(一) 花容端正にして縮皺なく花瓣厚みあるものを貴ぶ、二重咲は其重り密接したるものを優等とす、而して花瓣細みなく一般に大狂をなすは珍奇品とします。

(二) 花梗は成るべく短く強きものを貴ぶ、長く弱きものは雨露の爲めに花の下向し易きを以て之を忌みます。

(三) 花色は其何色なるを問はず單純にして光澤あるものを優等とす、又二花に著しく濃淡を呈し、或は周邊濃く真底薄きものは貴品とします。

(四) 花眞は雌雄露の發育良好平等にして稍々長く強くして且つ亂れざるものを貴ぶ、但し特殊の變化あるときは之を貴ぶことがあります。

(五) 花輪は大小を以て品位の高下を論じません、其理由は數多の花を一株頭に露開覆蔽せしめて、觀賞するからであります。

(六) 他に比類なき花形、花色を貴ぶは、他の花卉と同様であります。

(七) 實生樹の花は殊に鑑定に注意を要します、或は初は衰咲にして劣等の花であつたに拘らず、翌年は最上の二重咲となる等、一定の度がありませんからであります、故に少くとも三四年の開花を調査鑑定の上、優劣を確定せねばなりません、然らざれば大に品位の鑑識を誤ることがあります。

(八) 總て露開花は永く其花色と花容とを維持するものを貴ぶ、如何に秀逸なるも、早く褪色し、或は早く萎凋するも



のは大に其品位を損します、又咲初めは秀逸ならざるも満開後に至り益々色澤を加へ、他花の漸く萎凋褪色する頃に、鮮然頭角を出すものがあります、此れ最も賞ぶべき花であります。

(九) 麗躑は老樹の花が、稚樹の花よりも、久しきに耐え、且色澤麗麗人をして三者異種なるやの感あらしむるものでもありますから、總て老樹を尚びます。

四〇

### 第十二章 栽培法

#### (一) 盆 栽

- (イ) 播 土 は左の割合によく混和して用ひます。
- 畑土 (三分目の鉢に透したるもの) 五 升
- 堆肥又は肥土 (二分目の鉢に透したるもの) 五 合
- 川砂 (二分目の鉢に透したるもの) 五 升

右の内畑土は稍々輕鬆にして肥沃なる壤土、壤土を最良とします。粘土質は最も忌みますから用ひてはいけません。堆肥は人糞、馬糞、如土等を堆積し充分腐熟せるものを用ひます。肥土は畑土又は壤土一斗に油粕粉一升を混じ五十日以上を置いてよく腐熟せるものを用ひます。又非常の大株、老木等に鉢内の排水殊に佳良の必要あるときは、土砂共に稍々荒目の篩を用ひ、且土の量を減じて砂を増すがよろし。

(ロ) 移植期 移植後の手當宜しきを得れば年中蒸気えなしと申しますが、盆栽のものは開花後を最良とし、遠隔の地に輸送するには十一月上旬より三月下旬の間を可とします。



(ハ) 鉢 鉢は如何なるものでもよろし、併し植土の乾燥適度なるを避むの要があります。従て弊園は上圖の如き七製の本鉢にして白色の樂掛のものを最も多く用ひます。是れ觀賞に際し色彩の配合にも適するからであります。而して玉作りには圖中一の如き腰高のもの、自然作りには二及び三の如き稍々淺形のものを用ひ可とします。何れも樹の大小に従ひ適當の大きを選むべきは申す迄もありませんが、何れかと言へば、割合に鉢の幾分か細き位が良成績を得られます。又玉作、自然作共に樹の特に大なるものには四の形の大鉢を用ひます。

(ニ) 樹形の作り法 樹作り対込は花終りたる後直に行ひます。樹形は各人の嗜好に依り如何様にもなし得れ共、玉作りと自然作りとの二法に大別します。

玉作りを分ちて見察作、傘作の二とします。見察作とは圓形にして前を低くし後を高くしたるものを云ひ、傘作とは圓形にして中央を高くしたるものを云ひます。但傘作は見察作より煩勞多きが故に、當今は概ね見察作とりました。其法は麻糸、木綿糸等にて、適宜に枝條を引き廣げ、又徒らに成長したる枝は程なく切斷し、漸次繁茂するに従ひ、疎密なく、枝條を配置します。然るときは枝條格々増加密生し、成長の速なるものは、三四年の後には、頗る緻密にして透視し得ざる花球となります。此の如くなりたる後は、毎年花後全面を剪削するのみにて、別に配枝することを要せざるに至ります。若し又非常の老木にして枝數多きに過ぎ、勢力衰弱したものは、程なく冗枝を裁除し、之を培養するときは一箇年にして恢復し、強盛にして艶美の花を開くに至ります。又花球の下部に萌生する枝は、全く剪除します。若し一樹の内、勢力の偏したる部分あるときは、強盛なる枝條を充分に剪除して平均を保た



しめます。  
自然作は文人作とも云ふべく、玉作の如く形式に依らず、樹の成長繁茂に任せ、唯重複せる枝及徒長枝を程克く剪除配置すること、一般の文人盆栽と同様で直幹、斜幹、懸崖等隨意の形態に仕立ることが自由に出来ます。

(木) 肥料 肥料は移植後直に油粕粉末二匁乃至三匁を鉢内の土面に撒布し細穴の如露にて水を注ぎ、土面に附着せしめます、而して十一月下旬迄の間、毎月一回一匁内外前同様の方法にて施す時は極めて強盛にして美花を開きます。尤も此輩は徑八寸鉢を標準として示したものでありますから、鉢の大小や樹勢の強弱に依り、適宜に斟酌するがよろしいです。又移植後直に油粕粉一升に水二斗を混じ腐熟したるものを充分に施し、其後三週間隔てに三四回、梅雨後、土用の頃三三回、秋彼岸より十一月下旬迄の間に五六回、何れも第一回の半量即ち油粕一升に水四斗の割合に薄めて施すのもよし。従来肥料は水肥をよしとせしも近時の経験に依れば粉末の方煩勞少く、且悪臭を發せず、成績良好に付弊園では此方を主としてみます。



自然作懸壺

(注意) 早春より開花迄の間は施肥してはいけません、花を害するところがあります。  
油粕粉末は埋没してはいけません、埋没する時は醗酵して根を害する事があります。  
油粕を水に混じ腐熟せしむるには、五週間乃至七週間を要するものに付其以前に用意し置く必要があります。  
梅雨中は肥料を節減すべく多きに過れば俱腐れ枯死する事があります。  
(ハ) 灌水 夏秋は毎夕一度春冬は乾燥の度を見計ひ灌水するので又七月上旬より九月上旬迄の間は、毎夕鉢内の灌水を了へたる後、如露器又は噴霧器にて葉上灌水を行へば大に成育を良好ならしめます。但し湿度を過ぐれば大害あり、注意を要します。尤も灌水用の水は汲置のもの可とします。

(ト) 置場 此植物は烈しき陽熱を忌みますから、日當り殊に強き所は六月下旬より十月下旬迄、段簾を以て日覆することが必要です。日當りしからざる所は覆をなすに及ばず、棚は置場の都合に依り、何れの方面に向はしむるも可なれど、可成り陽向に設置するが得業也。段簾及距離は之に駢列すべき距離の大小に依り、適宜に組立てますが先づ上段の鉢の縁と次段の樹梢とが同じ高さになり、互に接觸せざる様少しく距離を存するを度とします。此割合にて三段を二組となす可とす。段數多きに過ぐれば、手入に不便にして枝葉を折損することがあります。

(子)開花前の手入れ法 躑躅は寒を忌みませんから別段防寒の手入は要しません。但早春蕾の少しく綻び始めるに至れば徐々に枝葉を動揺し枯葉花苞を脱落せしめ盆中を掃除し、花蕾が出初めたら夜間露を覆ふか又は軒下等に搬入して晩霜の害を防ぐがよろしいです。然らざれば花蕾を損傷することがあります。尤も室内、縁下等空気が流通の悪い所は、花色を損する虞あるを以て、之を避くるを可とします。而して大抵半分以上開花したるとき花棚に飾付けます。花棚は栽培棚より段階の差を少くする方が見栄があります。段数は二段より七段迄適宜に組立て、花棚の後面及兩側は、籠にて囲み且つ雨障子を掲げ雨害を防ぎます。斯くして初め一週間は、降雨及晩霜の恐れなき夜は、雨障子を除き露を受けしめます。ミすれば大に花色を濃く且艶ならしむることが出来ます。然るときは大體開花より三週間に上妍艶の花を観賞することを得ます。又花蕾多きに過るときは、十二月頃適宜に蕾を節減すれば大に色澤を増し、花輪は大きくなります。

(リ)落花後の手入れ法及播替方 開花已に盛を過ぎ花蕾脱落墜下するに至れば、實を結ばしめざる様、全く之を摘み去ることが肝要です。實を結ばしむるときは、樹勢衰弱します。但採種せんと欲するものは摘み去つてはいけません。花の摘取終らば、直に植替を行います。其法は先づ鉢より抜き、庖刀の類にて適宜に古土を削除し、前に述べました植土を以て植込むのです。但鉢底に木炭、荒砂、板炭等を敷き通氣の溜滞せざる様注意を要します。又叔設には極少量の硫黄末を混じ「シラキス病」の發生を豫防せねばなりません。

(二) 露 地

前に述べました盆栽々培の方法は、聊か其手数煩雜に感ぜられますが、露地栽培は至極簡單容易なる手数で、年々艶美の觀を呈せしむることが出来ます。左に露地栽培の要點を述べます。

(イ)用途 久留米躑躅は常緑性灌木でありますから、花期の美は云ふ迄もなく、花なき時にも後に觀賞の値

があります。殊に冬期は花色の濃淡に従ひ、葉も亦濃淡各種に紅葉します。例へば今頃々、若楓、紅葉の赤等は最も濃く、位の緋、麒麟、雲の上等之に亞ぎ、高砂、扇重、相生等は黄緑色に、暮の雪、青海、新雪の胸等は嚴寒にも尚綠色を保ち、花遊の如きは暗紅色を呈します。故に露地に栽培して觀賞の用途頗る廣く、其主なるものを記せば左の通であります。

(一)庭園、遊園地、堤防等の植込 起伏せる丘陵、斜面の崖、平地、池堤、沼塘等各種の地勢に應じ、躑躅を主體とし又は奇樹珍石に配し、四時其見事なる花葉を觀賞することが出来ます。殊に廣潤の地域に配植宜しきを得ますれば、看客をして覺えず去るを忘れしむる美觀を呈します。

(二)毛氈花壇の植込 久留米躑躅は密枝多花性でありますから、最も毛氈花壇の植込に適します。株の大きなものは之を點植して圓列、角列等隨意の形を作り、小なるものは之を平植、線植として種々の模様を現はし、之に檜葉、伊吹、芝等を配すれば實に整然たる美觀を呈し、世上比類なき花壇を仕上げることが容易に出来ます。

躑躅の毛氈花壇は或る草花の如く煩雜なる栽培取替等の手数を要せず、一度栽植したるものは簡單なる保管に依り、永久に之を觀賞することが出来ます。加ふるに其春季開花の美は勿論、夏の綠亦愛すべく殊に秋冬の候、他の一般の花壇が寂寥を呈するの時、獨りよく濃淡各種に紅葉して、美觀を染め出すに至りては、實に他の之に及ぶものなしと稱するも、敢て溢美ではありません。

(三)袖垣及び花壇の縁植 庭園の仕切、歩道の縁等處に應じ隨意に之を栽植美裝するときは、美麗優雅、柔も毛氈花壇に劣りません。尙趣向に依り種々に應用し得ることは限りありませんが、此には之を略します。

(ロ)場所と土質の適否 一日の内半日以上日當りの場所ならばよく適當しますが、大樹建物等の爲め全くの陰地と陽熱殊に烈しく乾燥過度の場所には適しません。排水佳良にして一般草木の成育繁茂する土質ならば、躑躅は最も

よく適します。就中稍輕鬆にして肥沃なる壤土、壤土は、鰯鰯の最も好む土質であります。強粘土と砂ばかりの處は之を忌みますから、若し斯様の場所に栽植する場合は、根域(根の周圍)になるべく多量の過土を入れて、植込めば成功します。

四六

(ハ) 植付の時期 植付後の手當充分なれば、酷暑の候を除き、何時にても差支ありませんが、十月末より翌年三月末迄の間を最良と致します。然して一度植付けたものは、爾後永年植替の必要ありません。尙遠方より取寄せ、或は遠方に輸送するには、十一月より二三月迄の間の寒冷の候が最良であります。此季節ならば多少の日数を費しても乾燥、蒸鬱等の危険なく、隨て樹の疲勞少く、活着最も安全であります。

(ニ) 開花前の手入れ法 別段手入れを要しませんが、時として蕾に蚜蟲(あぶらむし)の發生することがあります。其際はなるべく早く第十四章を参照し、適宜の藥液にて驅除することが肝要であります。

(ホ) 剪定法 落花後は直に株の全面を剪定することが肝要であります。其際根元露際等より出たる徒長枝及び無用の懷枝は、全部取り去らねばなりません。然るときは直に見事の新芽を出し、梅開後土用の頃には、各芽先に蕾を結びます。然して其頃より秋彼岸迄の間に出る徒長枝は、常に注意して下部より出たるものは全く取り除き、上部のものは二、三葉を残して摘み去ることが必要であります。

(ヘ) 肥料 油粕糞等最も適當します。且つ使用に煩勞愚臭なく便利であります。時期は五月上中旬頃剪定後直に充分に施し、爾後七月上旬(梅雨前)に一回、九月中旬(秋彼岸)に一回、十二月上旬(寒中)に一回、都合四回程度與すれば充分であります。尙施肥の際には熊手、小鍬等にて株元の土面を掻き起し、土地を膨軟にしたる後に肥料を撒布し、其上に僅かに肥料の隠るゝ程度に堆肥を敷ひ、後、如露器にて水を注ぎ、肥料を濕らし置くがよろし。右の通り實施すれば、年々必ず艶美の觀を呈します。

盆栽、花壇兩様の栽培法は、大凡前記の通りであります。共に注意すべきは害虫の驅除であります。故に害虫が少しでも發生したならば、甚輕に先ち第十四章を参照の上速に適宜の方法に依り、完全に撲滅することが、特に肝要であります。

### 第十三章 繁殖法

挿木、嫁接、株分、播種何れの方法に依るも、克く増殖するものであります。左に各種の方法を述べます。

#### (一) 挿木法

(甲) 土挿 最も古くより行はれ來れる方法でありまして頗る簡單なる保管で多數の苗を得るが故に天栽培に適用せられます。時期は開花後入梅の間なれば、何時にてもよく活着發根します。挿木は新芽の下部に前年の枝、一寸内外を附して切取り(但貴重種の種類にて二寸内外を附する能はざるものは一寸内外にても可)最眞直に生長せる新芽一本を残し、其他を截除し、二時間乃至五時間水揚げをなし、然る後挿付けます。そして挿し付くるには少數の場合と貴重種の種類とは鉢又は箱を用ひ、多數の場合は床地を用ふる方面便であります。鉢又は箱挿となすには、孰れも底部に木炭、荒砂、中砂、細砂を順次に敷きて水抜きをよくし、上面二寸位の深さに細く掘ひたる壙土を盛り、高低なきやうによく平均し、掌又は板片にて、一面に軽く押えたる後、細孔の如露にて充分に灌水し、直に挿付るのです。

床地は温氣の溜滞せざる半陰地を選び、幅三尺、長適宜とし、周圍に瓦又は板等にて地平より六七寸高く土留めをなし、其中に木炭及び荒、中、細砂を順次に敷き、水抜きをよくし、飾ひたる壙土を盛り軽く押え、灌水の後、挿付くると鉢箱に異りません。但床地は冬季防霜に便ならしむるため、南北の幅を三尺とし、東西を長く調整するがよ

四七

みし)而して挿付終らば直に細孔の如露にて充分に灌水するのです。

挿付の距離は密に失すれば鬱蒸し、挿木の腐敗を招く虞れあり。又疎に過れば風雨のため動搖せられ、活着るし故に挿木の葉の互に緩かに相接するを度とし、挿付け終らば直に覆土、腐等にて全く日光を遮り夜間及曇天の日は之を取除くのです。如斯する事約二週間に及べば、挿木は稍々強硬となるが故に、徐々に日光を透射せしむるときは土用前後に至り發根するものです。而して十月中旬以後は全く日覆の要はありません。然れども冬季は霜の爲め土面膨起し、挿木を抜き倒す恐あるが故に、藁、麥稈等を以て、南方高さ五尺、北方一尺の勾配にて覆蔽をなし、其害を防ぎます。鉢箱挿のものには植木室、軒下、椽下等に搬入すればよろし。但挿付より翌春植出しを行ふ迄の間は常に注意し、乾燥したるときは適宜に灌水するのです。

右の如く活着した挿木は、春暖と共に發芽成長を始めますから、早春に及べば發芽前に畑地又は小鉢に植出しを行ひ、充分施肥養育する時は、一年にして三寸乃至八九寸の成長を見ます。然る後各嗜好に従ひ玉作り、自然作り又は庭園植込等適當の樹形に仕立てます。

(乙)砂挿 土挿に比し煩勞多きも、發根成育共に迅速なるが故に、集約的で殊に新花の増殖に適します。時期は入梅の頃新芽の固定を始めたときを最良とす。挿床は平鉢又は果物、鮮魚等の空箱をよく洗へばよろしい。就中深三寸位、徑一尺内外のものは最も取扱に便利です。之に水抜をよくする爲め発砂、板敷等を敷き、其上に細く篩ひたる清淨の川砂二寸餘の深さを入れ、上部を平かにして挿木を行ひます。挿芽は長二寸位が適當です。甚しく微弱のものは挿付後腐敗し易く、又固定に過ぎたるものは發根が遅れますから、中庸を選び、新芽の付け元より振ぎ取るか又は鋭利の鋏にて切り取り、下葉二三枚を除き、全長の約三分一を挿入します。距離は土挿と同じく葉の節に相接するを度とす。

挿付終らば直に潤澤に灌水して室内、フレイム等に取り入れ、全く日光と空氣の流通とを断ち、夜間は外に出して露を受けしむるのです。然して三四日の後には晝間も室外に置き、藁、二重蓋等にて全く日光を遮り只氣通に馴れしめ更に三四日の後よりは順次に日覆を薄め、二週間後には一重蓋となし、其間一日に一回又は二回噴霧器、細穴の如露等にて葉上灌水を行ひ、常に適宜の水分を與ふるときは、三週間内外にて發根を始め、四五週間位にて芽先少しく發育を催し、根も小指頭位の砂を抱擁する程發生するを以て、此際小鉢、平鉢、箱等に植出を行ひます。其用土は一分五厘目位の篩に透したる川砂八分、腐葉一升五合、水苔の細く刻みたるもの五合を混じ、少しく濕りを與へて、よく揉み交へたるものを用ひます。

植付後は眞下に置き、肥料を與へず、只灌水と害虫驅除に注意し、愈々勢付き發育を始めて後、時々至て稀薄の水肥又は極少量の油粕粉末等を施すときは、其秋末には相當成育して蕾を持ち、土挿より遙に早き成績を呈します。尚温室、フレイム等の設備を利用し、溫度濕度を調節すれば、更に速なる効果を擧げ得るも、各位の経験に待ち茲には之を略します。

栃木地方に産する鹿沼土(一名玉土)を混用すれば、特に成育を佳良ならしめ、其地方にては露獨栽培上必要缺ぐべからざるものとせるも、遠隔の地に在りては、取り寄せに多額の費用を要し、且即時間を含む兼る等の不便あるが故に、茲には隨所に得易き川砂其他を用ゆることとしました。只注意すべきは、此法に依り砂を主體として仕立てる露獨は、爾後水年同様の栽培上用ゆる必要があります。若し急に壤土主體の栽土に改め又は露地に移せば、爲めに根腐れ枯死することが多いから、之を壤土に馴らすには稚苗の時即ち挿木より一回移植して充分の發育を遂げ、第二回の移植を行ふ際、其根部を水にて洗ひ、全く前の栽土を去り、直に乾燥せる壤土末を附着せしめて畑地又は壤土主體の栽土にて栽植するときは、毫も故障なく活着するものであります。

挿木の方法は大體前述の通りであります。兩法共深く注意すべきは、親木より挿木を切り取りて挿付迄の間に乾燥萎凋せしめざることであります。一度甚しく萎凋せしめたものは、如何に水に浸し回復せしめて後挿付るも、成績不良を免れません。砂挿木の若芽は、殊に其害甚しきものであるから、挿木を行ふ前に當りて、挿木の用意より置場に至るまで細心の注意を以て、總ての準備を整へ、然る後挿木の切取に掛るべく、其時刻は晴天の日なれば、なるべく早朝樹液の充分なるときに之を行ひ、傍に水を用意し置き一々之に浸すべく、又曇天、降雨の日に行ふも可し、要は挿木をして毫も萎凋疲勞を感じざらしむるに在ります。

五〇

### (二)嫁 接 法

此法は貴種の品種を急に増殖成長せしめんと欲する場合又は劣悪なる花を開く佳致ある大樹に良花を開かしめんと欲する場合に行ふ方法であります。主として寄接をなす。時期は春季發芽後入梅の間であります。活着したものは、其秋末又は翌春發芽前に切離すのです。接法は普通一般樹類の接法と異なりません。但し第一の目的にて寄接を行ふには、なるべく強盛にして生育迅速なる砧木を選ぶの必要があります。當地にては主として淀川一名平戸と稱する花葉共大にして、成長迅速なる品種を用ひてゐます。

### (三)株 分 法

株分法は増殖の度合に於て、挿木には及びませんが、失敗は少いので、往々之を行ひます。其方法は潤花後入梅の間に於て、簇生せる株より分取せんと欲する枝葉の下部に刀痕を附し、而して肥土を培ひ置けば、早きは其秋遅くも二年にして發根しますから、三四月の頃、分け取り、植出しを行ひます。若し此の際發根尚不充分と認むるものあるときは、適宜に截枝を行ふのです。

### (四)播 種 法

此法は主として新優種を得んがために行ふものであります。第四章に於て述べました通り元祖坂本氏の始めて成功せらるゝ迄の苦心は察するに餘りありますが、今や其餘澤に浴し、何人でも容易に之を爲し得るに至りました。種子は十月下旬成熟しますから、莢頭の少しく開きたる時摘取り、陰干貯藏し置き、三月中旬より四月中旬の間に、鉢底に木炭、荒砂等を敷きて通抜きを能くし、輕鬆なる壤土を入れ、高低なき様平均し、其上に細き川砂土水苔の細く刻みたるものとを等分に混じ、能く揉み交へたるものを、土の漸く離るゝ位に入れ、掌を以て軽く押へ、如露にて充分に灌水し、然る後種子を播下し、覆簾下に置き、水加減に注意すれば、約四週間に於て發生するものであります。但降雨の節は雨覆をなすか又は軒下等に取入れ、種子の流失せざる様注意するのです。此の如くして漸く發生したる稚苗は、至て細小纖弱なるが故に、常に特に注意を要します。若し烈しく密生せし時はピンセット、箸等にて程よく間引きを行ひます。然して初年は施肥及植出しをなさず、冬季は室内、軒下、換下等に搬入して霜害を防ぎ、翌春發芽前に至り強根を損せざる様態に照取り苗鉢又は床地に植出しを行ひます。

苗の距離は二寸角に一本を適當とします。爾後灌水遮陽に注意し、愈活着して成長を始むるに至れば、徐々に遮陽を除き、時々極めて少量の油粕粉又は同量の水を施すときは、秋末に至り二寸乃至三寸の成長を見ることが出来ます。仍て翌春挿木苗同様の取扱にて、畑地又は小鉢に植出しを行ひます。如斯するときは早きは播種より滿三年、遅くとも四五にて結實致します。又發生後双葉の充分發育して本葉の發生を催したる頃、急に植替を行ひ、保管に注意すれば苗全部の發育を均等に旺盛にし結實の遲延を防ぐことが出来ます。是最も進歩したる育成法であります。

(注意) 種子は理想花を媒助する必要があります。其方法は附録第一章草月節の節に於てあります。

第十四章 病蟲害及び驅除法

驅除には大に憂ふべきほどの病害を未だ認めませんが、青蟲の主なる種類及び驅除法は左の通りであります。  
(一) 養 蟲 最も注意すべき害虫であります。常に新葉、樹皮を蝕害し甚しきに至りては、養液の循環を絶ち、枯死せしむることがあります。

驅除法は注意して捕殺すること、又其發生夥しきときは硫酸鉛其他の毒劑を撒布驅除します。  
(二) 葉葉蟲 從來被り蟲と稱せし食葉蟲でありまして、一見蠶莩狀をなすが故に其名があります。黒色貝殼狀の巢内に黄色の幼蟲存在し、嫩芽及び葉を喰害します。  
驅除法は常に注意して捕殺するか、或は早朝又は夕刻樹下に受器を當て、急に樹を震動すると該蟲は其受器内に墜落しますから、集めて潰殺することが出来ます。

(三) つゝじの葉蜂 七月上旬及び十月月上旬に形狀蜂に似たる漆黒色の成蟲が、新葉の縁邊に、十數箇の卵子を並列産下します。數日を経れば孵化して幼蟲となり、葉を蠶喰し、其害頗る甚しきことがあります。幼蟲は青色にして光澤を有し、脊上に黒色疣狀の小突起があります。充分成長すれば長さ五六分に達します。  
驅除法は産卵した新葉及幼蟲を除くにあります。産卵した新葉及幼蟲は容易に發見し得るものでありますから、之れを採取して除きます。成蟲は殊に注意捕殺して産卵を防止します。若し又幼蟲の發生甚しき時は、除蟲菊加用石油乳劑、硫酸鉛、ネオトン乳劑等を撒注驅除せねばなりません。

(四) つゝじのりんが 俗に花蟲と稱します。初夏より秋末迄の間、花蕾のみを喰害する茶褐色の小蟲であります。充分成長すれば長さ三四分に達します。成蟲は六月頃より秋末まで絶へず羽化します。翅の開き長さ六分内外、前翅の中央に褐色の小斑點があります。夜間黒く、飛翔運し、該蟲の害は毫も樹勢に關係ありません。之れが爲め一年の勞費を空しくするものでありますから、注意して驅除せねばなりません。  
驅除法は成蟲の發生盛なるときは、夜間誘蛾燈を點じて、之を誘殺します。幼蟲は形體頗る小さく、葉間に蟄居し見出し難きことがありますから、常に枝葉間に枯葉や蜘蛛の巢等の附着せざるよう取除き、且つ鉢内の土面を掃除し黄葉の散點に注意し、捕殺するがよろしいです。若し其發生甚しきときは、藥液撒注を行ふを便とします。其法は初め水一坪に對し石鹼(マルセイユ石鹼を可とす)二匁を入れ、ヌル火にて煮沸し、其溶解したるを度とし、純良なる除蟲菊粉二匁を入れ、直に火を去り、よく攪拌混和せしめ、密閉冷却したる後、布片にて濾過したる液を晴天の午前中に葉の表裏より噴霧器にて撒注するのです。而して五日乃至二週間を隔て、二三次撒注するときは容易に撲滅することが出来ます。

但該液は腐敗し易きが故に使用の都度製造するがよろしいです。  
(五) 金龜子の幼蟲 久留米地方にては、俗に「まなくそむし」と云ひます。土中に發生して根部を蝕害し、甚しきに至れば枯死せしむることがあります。該幼蟲發生せしときは、必ず土面を掀起せしめますから、若し少しにても土面掀起を認めたら、鉢植のものは鉢より抜き土を落し、克く檢視し、悉く捕殺したる後、新しき鉢土にて植込み直に灌水し、爾後數日間、日光を避け勢づくに従ひ、順次舊の位置に復します。地植のものには「デンシ」を五百五十倍乃至二百倍に溶解し、根部に潤澤に撒注すれば、驅除には無害にしてよく死滅せしむることが出来ます。孵化期は夏及秋に多く、春冬も時として生ずる事があります。若し又被害甚しく細根皆無となりたるものは、鉢植地植共に根部を清水にて洗ひ、乾燥せる盛土を撒布附着せしめ、然る後前述の通り植込みを行へば恢復の工合良好であります。

(六) 蚜 蟲 早春より開花前に互り、時として蚜蟲の發生蔓延を見ることがあります。此害にかゝれば、樹勢衰へ

美花を開きませぬから、少しでも発生を見たら、前記花蟲駆除に用ゆる石鹼除虫粉液を、晴天の午前中に噴霧器にて  
灌注するがよろしいです。二三日で全く駆除することが出来ます。

(七)赤壁蝨 俗に「ひむし」と稱します。肉眼にては殆ど発見し難き細微な赤褐色の害蟲で、形蜘蛛に似てゐます。  
葉の裏面に群棲して養液を吸致す。被害甚しきに至れば、葉は褐色に變じ、黄斑を生じ、遂に落下するに至ります。  
該蟲は夏秋の間、空氣の乾燥するときに發生多く、冬季は落葉又は地中に入りて越冬します。

驅除法は常に枝葉間に枯葉、蜘蛛の巢等の附着せざるよう注意し、通風を良好ならしめ、冬季該蟲の其間に越冬す  
るを豫防せねばなりません。初夏の候、若し少しにも発生を認めたるときは、石灰硫黄合劑ボーデー、三度のもの  
又は水一升に石鹼二匁を溶解せしめたものに、硫黄華二匁乃至三匁を投入攪拌したるものを、晴天の午前中に葉裏よ  
り噴霧器にて灌注します。而して二三日乃至一週間を隔て、二三日灌注すれば、容易に撲滅することが出来ます。

(八)軍配蟲 一見軍配狀の小蟲にして、體軀は暗褐色を呈し、前胸の左右に軍配狀の突起物ありて白色を帯び、中  
に褐斑を存す。又前胸背に烏帽子狀の突起あり、前翅は略方形にして薄く網狀の翅脈を有します。體長は二分内外、多  
く葉裏に群棲して養液を吸致します。被害葉は爲めに褐色して白斑を生じ、葉裏は黒褐色の分泌物に依り不潔となり  
菌しきに至れば落葉します。該蟲も亦空氣の乾燥するときに於て、能く繁殖するものであります。驅除法は前記赤壁  
蝨の條に準じます。

(九)蚯蚓 直接樹を害することは有りませんが、盆栽の土中に發生して植土を軟起擾亂し、爲めに濕氣の溜滞を  
來たし、根部を腐らすことがあります。

驅除法は棒油箱一合を水五升乃至七升にて煮沸冷却せしめたる液、又はデジシンの二百倍に薄めたものを晴天の午前  
に根部に多量に注ぎます。蚯蚓は數分間にして土面に脱出死滅します。

總じて露菌は性強健なるも、害蟲の發生甚しきに至れば樹勢の衰弱を免れませんが、少しにても蟲害の發生を認  
めたときは、蔓延に先ち、速に驅除法を施し、徹底的に撲滅することが肝要であります。又害蟲發生の處ある露菌に  
對しては、樹の冬期休眠中即ち十二月乃至二月の間に、青酸瓦斯燻蒸(内容積一千立方尺に對し青酸加里二五〇瓦、  
時間四〇分)又は石灰硫黄合劑灌注(一度の溶液を潤澤に注ぐ)を行ひ、其發生を豫防するは樹の保健上特に有効で  
あります。

### 第十五章 促成開花法

我久留米露菌は、本邦露菌中、特に促成開花せしめ易き品種であります。而して其方法は至て簡單である。之れ久  
留米露菌が内外人士の激賞を博する理由の一であります。促成すべき露菌が盆栽なれば其儘、又畑仕立のものならば  
適宜の根土を附し、箱、鉢等に移植するか、又は直接温室内の棚上に、畑土、水苔、川砂等にて密植し、直に充分  
に灌水し、爾後毎日二三回、噴霧器、如霧等にて葉上灌水を行ふ。湿度は晝間最高八十五度、夜間最低五十五度乃至  
六十度を適當とします。斯の如くするときは、三月一日に搬入したもので、其月二十日頃迄には、見事に開花を始め  
ますから、其際冷室に移し、三日間位低湿に馴らして後、所要の場所に運ぶを例とします。其間株元の水加減に注意  
すべきは勿論であります。葉上灌水に依り、常に相當の濕氣を有して居りますので、直接灌水の要なき場合が多  
いのであります。此法に依り早咲せしめたる露菌は、花の保ち特に永く、天然咲の二倍に及ぶことがあります。

右は當久留米にて、天然より一ヶ月早目に、開花せしむる標準手入れ方でありませぬ。此程度を斟酌すれば、十二月  
下旬より天然開花季節の間に於て、何時でも隨意に開花せしむることが出来ます。要するに早き程、割合に多くの日  
數を要し、遅き程即ち天然開花季節に接近する程、短時日にて開花せしめ得ること、一般花卉の促成と同様であります。



又蕨菜苗促成用と同式の醸熟温床にても、容易に早咲せしめることが出来ますが、此法に依るものは、花梗の少しく徒長軟弱を免れません。

久留米躑躅の總てが特に促成開花に速することは、前述の通りであります。其中最も早咲容易に、且兼日に速するもの即ち新種代表花とも稱すべき花品は左の通りであります。

- 淡色 高砂 初音
- 桃色 麒麟 吾妻鏡 舞媛
- 濃紅 今御々 若楓 位の粧
- 白色 幕の雪 新雪の胸
- 紋 常夏 蝦夷錦
- 紫色 以呂波山 九重 大内山

### 第十六章 久留米躑躅に就ての詩歌

私は淺學薄才和漢古今の書に通曉致しませぬけれども、古來、躑躅に就ての詩歌は甚だ少く、偶々之れあるものは皆陰鬱悲哀の情を述べたものが多いやうであります。曾て弊園躑躅満開の時に一群の觀客が躑躅の美を激賞數次相談じて申されますのに、梅に、菊に、蘭に、竹に、將た牡丹に又朝顔に尙其他の草木に至る迄、古來之れを賞讃するの詩歌甚だ多いが、獨り躑躅に於て然らざるは何故ぞやと、其の時一客の申されるには、古來觀る所の躑躅は、血の如き不快なる紅色一種のみであつたので、之を賞讃するの理なし、若し今茲に見る如き各種の美花があつたなら、古來の文士必ずや應に歎美して之を詩に歌にするに決して吝ならざりしなるべしと。宜なる哉。舊久留米藩大将有馬

息翁翁には左の詩篇があります。

坂本卿家躑躅花席上賦贈時余有車役命  
息翁 照

磁蟻一様駐紅霞 來酌芳醴雅士家  
休道暮輪還董役 杜鵑相映季春花

右詩箋は八女郡星野村の素封家伊藤氏秘藏の品でありましたが、弊園が躑躅栽培に熱心なるの故を以て、特に愛を割きて寄附せられました。蓋し今より凡そ百有餘年の前に成れるものでありまして、我久留米躑躅に就ての詩歌中、最も舊きものならんかと思はれます。郷土詩人宮崎來城先生弊園の躑躅を賞して左の二篇を贈らる。

東米之西花爲國 兼碧翠紅調顏色 躑躅每歲開獨醒 不共桃李作寒食 無數瓦盆無數花 白者如雪紅者霞 車馬  
 昨日嬉春客 餘歡欲補今復過 濁酒不厭花影亂 沾衣偏愛花粉散 主人與花皆有情 欄前留客飽看景 好事百年  
 本無多 到手莫負金巨羅 春風去矣綠陰合 明日花老如君何 廣樂園觀躑躅歌 稿碧 來城

詠廣樂園之躑躅歌並端歌

中村水城

昔の根の長き春日に、咲出るついでの花は、國毎に多くはあれど、里毎にさにはあれど、來日のや赤同の紫か、璞のとしの三十年、むら肝の心盡して、おぼしつる躑躅はしもよ、単人の國に在とふ、霧島の根さしといへと、親木にも類ておひす、其花に似ても匂はず、古へに見さりし花も、春毎に咲増りつゝ、年のほに繁り榮えて、開つゝく花の笑まひは、淑人の衣に織とふ、さくら形錦の手機、倭文はたの五百機なして、目もはるに咲のさかりは、くすしくもたへなりけりと、見し人の語りには、聞人のいひつかひつゝ、遠近の何國といはず、車ゆも徒歩ゆも里ひ、

入こそは山をなしけれ、山なすや高き其名は、海なすや廣く蕪りて、久方の雲をまでこそ、たか々に聞えあけけ  
れ、此處思へば、あやにかしこく、其處思へば、綾にたふとく、恐くも尊きかもよ、いそしきや赤司の翁か、おほし  
つるこの國をきて、國のはて里のかきりを、まきぬともたくふつししの、またもあらめやも。  
雲井にもほふつしをこのそい

おもておこしのはしめにはして

明治四十年前田正名翁弊園歸國満開の時に臨み、左の一首を贈さる。

あゝ一つ心をこめて撰へとも

皆あらはれてあらふ品なし

尙弊園の歸國を賞して贈られたる詩歌は

廣樂園主博繁

幾歳培來歸國花

廣分新種令名加

人間此樂所何比

譽滿坤輿福滿家

詠歸園歌並短歌

久留米

加藤

田千秋

唐衣春のにしきと咲く花のつよし山吹梅さくら心くしに生ほしつる宿はあれとも生ほしつる園はおほけとつよし花  
あけにむらこにいろくの花のきはみを十重廿重植を渡したるこの園のさかりとなれば朝日子の光はあけにゆふつ  
ゆのいろはむらこにうつりゆく葉はかりかはともし火の照らすまにくつよし花にはへるものを何しかも夜のにし  
きと言ひすて、今日まで我はきても見さりし。

反歌

年月の心つくしのいろみえてにほふつしのかすもしられす

詠 園

数おほく種を並へたるこの庵のつよしの花そ世にたくひなき  
雲井までにはふもうへな敷くつよしの花のとしに榮えて  
常磐にこゝろをこめしいろみえて世にたくひなき花つよしかな  
さまくしに咲けるつよしの花にこそこゝろつくしのいろもみえけれ  
なつかしき味か赤もににつよしのにはふやとこそすきかてにすれ  
おりかけし春のにしきと見るまてに咲くかつよしのこそめ白たへ  
類なき君か垣ねの岩つよしはいはてもはなのいろは勝れり  
岩つよしはいはねと園の名にしくる今をさかりのちしほ初しほ  
つよし花にはふいろにもさまくしの人こそとはめ今さかりなり  
生ほしつる心つくしを春深くにはふつよしのいろに見るかな  
きて見れば庭のつよし深み草花のにしきといふへかりけり  
からにしきまりしく庭の都々志花百千のいろは訪ふてこそしれ

柳河	立花	鉄子
同	同	薫子
同	同	葛子
同	同	安元
同	同	滋足
同	同	稻次
同	同	成令
同	同	林幸
同	同	行
同	同	上田
同	同	豊秋
同	同	井上
同	同	鶴代子
同	同	戸田
同	同	光子
同	同	永田
同	同	きく子
長府	富岡	幸輔

江湖諸彦の名吟佳作は勿論、古來詠園に關する詩歌俳句等に就て、御高識あらば、幸に通報垂教の勞を各まれざら  
んことを希ひます。私共は次版を期して之を發表し、以て同好の方々に頒たんと欲します。  
左に考喜次郎が終級賞章拜受に際し寄せられたる諸家の清詞を掲げ謹て厚意を拜謝します。但順序は御寄贈の目次  
に依りました。

古訓一首星廣樂園主赤司翁  
 一園幸萬卉 東米之南筑 種藝界裏雄 馳騁山鄧躑 門迎親王駕 躬留 玉尊臨 自開大市場 遠種及殊俗  
 雅業在生々 仁術老愈熟 補成造化工 彭亨花木錄 培養增國華 扶植膺天福 兒孫同益榮 陸離新綠  
 大正丁巳夏日廣樂園主赤司翁頌綠綬章依禮之  
 廣興園藝家彌旺 榮惠歡慈福自來  
 廣樂園中星赤司翁翁昨授綠綬章三四語故及  
 三月遊芳極萬家 名園無限好盤霞 主翁近佩綠綬章 光彩添春映百花  
 盤谷 細 見 保  
 宮 崎 來 城  
 高 橋 冠 春

廣樂園主壽而康 年垂八十鬢猶蒼 溫平其德出天性 孝子順孫緒綿綿 一家團聚卅四口 和氣蕩々春滿堂 難大相  
 親亦讓食 家風不減唐平張 種藝爲業誦樹性 培養之妙非尋常 奇工應駕郭家駝 偉構何讓牛橋莊 門邀東西南北  
 客 國黨春夏秋冬芳 苦心最是培藝輩 變種百態破天荒 單瓣複瓣隨意發 濃彩淡影炫眼光 南唐五月樂芳歇  
 獨與牡丹競晚粧 魏紫妖黃竟無色 千盆現出碎錦坊 久留米鄧躑之名喚四海 柳航運輪車西洋 家運隆々逐日盛  
 殖產興業潤鄉黨 遠近敬仰慕其德 名達 天關聲譽揚 嗚呼家風美與國花美 煥然映發綠綬章  
 贈 赤 司 翁  
 積善七十年 至誠達九天 名園春無盡 綠綬章燦然 君不見斯翁愛花是愛國 偏體舉勳勳產殖  
 贈廣樂園主人 竹 江 若 林 草  
 和氣薰人好老翁 園林寄迹造生涯 一從一葛無非玉 斯子斯孫總是花 綬章胸間天龍錫 名馳海外國光華 春芳秋  
 豐樂何極 清福滿門追歲加  
 久留米鄧躑誌終

附 錄

第一章 阜月鄧躑

阜月鄧躑は、各地に栽培賞せられたり、ありますが、優良の品種は甚だ稀いのであります。弊園は夙に久留米鄧躑  
 と共に改良に努力しました其効益しからず漸次優秀の美花を得つゝあります。大正四五年年度幣園營業案内には既に優  
 品六十九種を發表し、其の結果、其の際既に種類の進歩に又栽培繁殖の方法に、我久留米は、國內に冠たりとの世評  
 を博しました。然れども華客の要求と弊園の希望とは、取て此れに満足することが出来ません。爾來種親の選擇に、人  
 工媒助に、又播種育苗の方法に、益々研鑽を加えまするに従ひ、毎年咲き出る新花は、擧げて數ふべからざる程であ  
 りますが、大同小異、秀逸の花品は千一に當らず、常に以て其酬の其勞を慰するに足らざるを遺憾としておました  
 然るに明治四十三年五月個々阜月鄧躑關係の條に、農商務省の興津園藝試驗場技師谷川利善氏の來園あり、話柄は  
 新花養成の事に及び、具さに人工媒助の方法を授けられました。其方法は頗る精巧にして從來實施せる所と大に異なる  
 のがあります。因て其傳授に依り、石田、博多白の二種を母樹とし、各種の花粉を媒助して、一たび之を試験しまし  
 たが、結實良好、播種、育成幸に宜しきに過し、約三千の新種を得て、大正三年より開花を見るに至り、効果實に  
 豫想の外に出で、驚く程の良果を奏しました。此に於て素帳を製し系統、花形、花色、樹性等を詳記し、在來種に似  
 たるもの及び劣等のものを除き、特に優秀の新品を選抜し、新に花名を付し、大正六七年度幣園營業案内に發表して  
 二十三種（在來種七十六種の外に）を發表致しましたところ、非常の好評を以て迎へられ、幾くもなくして賣切の盛  
 況を呈し、更に七八年度には二十三種を増加發賣し、又一層の好評を博し、大正七年六月我三井農會主催の阜月鄧  
 六二



草月露園栽培花壇

六二

露園評會に於ては振賞總數一等三點、二等三點、三四等十六點、計二十一點の内、露園の出品は二等二點、二等三點、三等二點、四等三點計十點を受賞したのであります。是れ一に谷川先生の賜であります。先生は實に我露園界の天恩師であります。露園は茲に滿腔の謝意を表する爲め、左に先生教示の媒助法を記し、以て江湖諸彦の参考に資します。若し夫れ此法に依り更に超群の新花を得ましたら、當に露園の微衷を達するばかりでなく、我國露園界の爲め慶賀すべき事でありませぬ。

(媒助法) 樹勢強健の母樹を選び花蕾既に筆頭状をなし、二三日を経て開花すべきものを採り「ピンセット」にて花蕾を破り、雄蕊を摘み去り、雌蕊のみをとり、蜂蝶等の接近媒介を防ぐ爲め袋掛けをなし、四五日を経て袋を除き、雌蕊の發育して柱頭に蜜の充滿せるを度とし、理想の花粉を媒助し、直に袋掛を行ひ、一週間餘を経て袋を除くべし。而して十月末葉頭の少しく裂けたるとき、摘み取り貯蔵し置き、翌春彼岸頃久留米露園と同様の方法にて播種すべし。(注意)(一)袋中雌

蕊の發育程度を測る爲め、袋外に同程度の標準花を挿し置くを便とす (二)不用花(媒助用及び標準用の外)は最初袋掛の際、全部摘み去る可とす (三)母樹は葉形、枝質良好にして結實し易き單花を認むを便とす。

大正六年六月九日東京帝國大學理科大學教授藤井健次郎博士は、草月露園調査の爲め、九州巡回の際、來園あり。人工媒助家数を調査せられ、系統的記録の設備を賞讃せられました。尙翌七年花時再び來園あり、大正三年媒助實生の開花に就き、詳細調査せられました。其際媒助に依りて得たる新花及び附近山野に於て採集したる露園の變種數品を呈上せしに、其後同大學總長山川博士より鄭重なる謝状を寄せられましたことは、第九章に掲げました文書の通りであります。露園は藤井博士の來訪を得て、種々有益なる教示を辱ふし、實に感謝に耐えませぬ。其の中露園は博士教示の花粉貯蔵法に依り、大正七年春久留米露園の花粉を貯蔵し、草月露園に交配して一の新品種を得ました。即ち本章に詳記せる久留米草月であります。

尙此法を利用して西洋蔬菜、草花の梅雨期を経過し發芽力を失する種子を貯蔵して、意外の好成績を得ました。該法は遠隔の地より花粉を輸送する際又は同種露園にして開花期の異りたるもの(例へば久留米露園と草月露園の如し)を交配する爲め、又早咲のもの、花粉を遅咲のもの、開花するまで貯蔵生存せしむる方法でありまして、断花改良上、非常の効果あるものと信じます。左に其方法を記し、江湖の参考に供します。

花粉の充分發育せる雄蕊を摘み取り、吸取紙に挟みて花絲の水分を壓取したる後、パラフィン紙に包みて乾燥器(デシケーター)内に貯蔵するときは、花粉は三十日乃至六十日位生存するものなり、故に隨時之れを取り出し理想花に交配するを得べし。乾燥器は玻璃製にして器底に鹽化加里を裝填し、蓋の接合部には「ワセリン」を塗布して空氣の流通を遮断し、鹽化加里の吸取力に依りて器内を乾燥せしむるの裝置なり、器は醫藥機械舖にて販賣す。草月露園は性質強健にして五六月の交に開花し、花輪豐大、色彩及び花形の變化頗る多く、樹姿俊麗にして雅致があ

六三





白鶴 白雲 白雲 白雲  
 白雲 白雲 白雲 白雲  
 白雲 白雲 白雲 白雲



白 霞

- 功 車 妙 船 津 川 紅 鏡 早 飾 葉 錦 出 紫 子 出 紫 子 出 紫 子
- 功 車 妙 船 津 川 紅 鏡 早 飾 葉 錦 出 紫 子 出 紫 子 出 紫 子
- 功 車 妙 船 津 川 紅 鏡 早 飾 葉 錦 出 紫 子 出 紫 子 出 紫 子

優等新花之部

博多 白石 白重  
 石山 白重  
 熊野 白重  
 伊達 紫重

其他品位未定の實生新花多ありますが、茲には略します。  
 只注意すべきは此草月の紋り種類は、枝變りと稱し、往々無地色のみを枝を出すことがありますが、是等は再び紋りとなりませぬから開花の節切り去ることが必要です。又底白期は樹勢旺盛に過ぎますれば底白とならざることがありますが、肥料を節し栽培すれば、必ず鮮麗の底白となるものであります。

第二章 久留米草月

前章に述べました藤井博士御傳授の花粉貯藏法に依り、弊園は大正七年春、甫めて久留米草月の花粉を貯藏し、草月草月に交配して、一の新花品を得ました。即ち本章に記する久留米草月であります。久留米草月の名稱は博士の命名を仰ぎたる新種維持の名稱であります。樹姿、花容、開花期等總て兩者の中間にして、性質強健、栽培容易なるが故に、是亦益哉、庭園、花壇何れにも好適し、以て兩者の花季間を聯結せしめ得るのであります。而して斯種の特に誇りとする所は、草月草月の如く晩霜の爲めに嫩芽花蕾の腐死することなきにありませぬ。栽培法其他は久留米草月と同様である。爾來弊園は毎年交配を行ひ、審査監選の上、昭和七年度營業案内には、左の品種を發表し得るに至りました。

安日日月春風神松



宅 照 柱 風 雪 風 風  
上赤紅紫斑白一重中輪  
上赤紅紫斑白一重中輪  
上赤紅紫斑白一重中輪  
上赤紅紫斑白一重中輪  
上赤紅紫斑白一重中輪  
上赤紅紫斑白一重中輪  
上赤紅紫斑白一重中輪

宅 安

西野日月大



行 櫻 宮 冠 丸 典  
紫斑白一重中輪  
紫斑白一重中輪  
紫斑白一重中輪  
紫斑白一重中輪  
紫斑白一重中輪

七〇

風 松

旭臘平陽



先 月 和 炎  
紫斑白一重中輪  
紫斑白一重中輪  
紫斑白一重中輪  
紫斑白一重中輪

守 關

關

守 上桃色一重中輪一花の内に赤く濃淡あり

### 第三章 大輪性露陽

琉球露陽(平戸つゝじ、浚川つゝじ等の別名あり)唐露陽等の品種を蒐め、假りに大輪性露陽と呼び本章を設けました。該種は本邦露陽中、枝葉最も粗大、花輪も亦巨大にして雄蕊の數、十本あるを特徴とします。花は久留米露陽より少しく遅れて開き、性質最も強健、成育亦最も迅速、植種の手入を要せずして容易に大株となり、高一丈枝張之れに準ずるもの珍らしくありません。庭園、遊園地等の廣場植として特に適當の品種であります。

本来花色の種別甚だ少く、僅に白、桃、赤、紫等の數色に過ぎません。花径も平凡にして我久留米地方にては露陽中の下等品として取扱はれ、時に久留米露陽、早月露陽等の接木結に用ひらるゝ事ある位でありましたが露陽は大に見る所ありまして、大正十年より之が種類寛

有

新花特別品

明 露陽 上桃色一重中輪



集且改良に志し、大正四年度營業案内に十五種を發表しましたのを始とし、爾來毎年熱心改良の勞漸く酬ひられ、年  
を逐ふて單純平凡の域を脱し、當今では頗る優秀なる形多の品種を得、其内特に選擇を嚴にし、昭和七年度の營業案  
内には、左の四十一種を發表し得るに至りました。

- 天 材 女 上丹紅紫掛又は二重紫大々輪彩色形上
- 天 川 雲白地上紫紋二重大々輪
- 天 心 淡紫上紫純白一重最大輪半白牡丹中特殊の純白紫掛
- 天 衣 手結紫白紫掛又は二重紫大輪
- 天 旅 薄紫二重紫大々輪
- 天 陽 薄紫二重紫大輪 歩出し紫に白紫
- 天 武 紫紅牡丹砂紫長員大輪
- 天 景 薄紫色二重紫大輪
- 天 路 淡紫地紫紋二重紫大輪 色澤上
- 天 島 白紫紅紋少々入波打砂紫二重大々輪



陽 山 春 薄紫紅紫掛二重大々輪  
紫紅牡丹二重大輪  
薄紅地紫紋少々入紫白二重大輪

- 芳 日 春 雲紋紫純白二重大々輪
- 日 出 薄丹紅紫掛しく白し二重大々輪
- 大 海 淡紅一重九輪大々輪
- 大 冠 薄紫丹紅紫純白一重九輪紫大輪
- 大 洞 薄丹紅一重大々輪彩色形奇
- 大 星 薄紫地紫紋は彩色に紫紫輪一重大々輪
- 紫 光 薄紫地紫紋は彩色地に薄紫紫紋又は紫掛紫一重大々輪



芳 日 大 紫

- 新 司 精 花 武 竹 江 宋
- 思 美 藏 生 の
- 嶺 廣 雲白地上紫紋二重五輪
- 島 薄紫地紫紋紫はかし二重五輪
- 島 雲白地紫紋二重又は紫掛大輪
- 野 薄紫紅一重一重紫交せ
- 房 薄紫八重
- 扇 薄丹紫一重且大輪紫紫掛
- 人 淡紫紫純白一重
- 嶺 雲紋紫白一重



嶺 廣 島 野 房 扇 人 嶺

五月 白に紫紋一重中輪  
白牡丹 白牡丹  
紫牡丹 紫牡丹  
紅牡丹 紅牡丹  
田子の浦 雪白一重  
白平戸 雪白一重  
紫平戸 紫一重  
紅平戸 赤紫一重

右の如く改良進化したる品種に至りては、之を盆栽とし、久留米園中に懸列して、通色なきのみならず、巨大の珍種として特に衆目を惹くのがあります。又造園法に一新を加へ、庭園や廣場を美観するに至らんか、必ずや久留米園、草月園と共に賞用せらるゝの時あるを疑ひません。且促成開花の容易は久留米園同様であります。栽培法其他總て久留米園に準すべく最も簡易であります。

第四章 アザレヤ、インヂカ（印度園）

本邦にては西洋つゝじ、阿蘭陀つゝじなどと稱し、其花輪の大なること、色彩の濃艶なることに依り、好事家に愛賞せられ、アザレヤと云へば此園と思はれる様になつて居ります。該種は初め印度原産の園を歐洲へ輸入改良せしもの由、爲めにアザレヤ、インヂカと稱せらるゝ様になつたこととありますが、後、此原産地は印度ではなく、支那の南部であるとの説が有力となつて居ります。然して阿蘭陀、白耳義及佛蘭西の北部地方等は斯種栽培の最も盛にして進歩せる處であります。従て毎年此等の地方より諸外國へ輸出する數量、價格は頗る多額に上るさうであります。

此園の我國へ輸入されたのは、何時の年代か詳かではありませんが、弊園が初めて手に入れたのは、明治三十七年の春、當時大日本園藝會の會長であつた大隈侯爵閣下より、弊園が園に熱心せるの故を以て、特に愛を判かれ、

種苗三株の寄贈を受けた時であります。内一株は到着の當時根虫の害を被り居りし爲め、遂に活着致し兼ねましたが残り二株は久留米園と同様の方法を以て培養丹精の結果、相當の繁殖を遂げ、明治四十一年度の種苗定價表に掲載發賣することを得ました。其説明及び苗の定價は左の通りであります。



冠王ガチンイサレザア

アザレヤ、インヂカ之部（印度園）  
印度原産の園花を歐洲にて改良したるものにして花形豊大色彩艶麗頗る貴重なる品なり培養法は霧島園に全じ該品は園内種苗商中弊園の外未だ發賣せるものあるを聞かず。  
第一號 雪白八重牡丹咲十二月より  
（卷首寫眞版参照）  
翌春四月迄咲續く 壹本に付 貳圓  
第二號 上紅爪白八重四月咲全  
（卷首寫眞版参照）  
貳圓

き以前ではないと信ぜられます。然るに弊園に於ては、其後久留米園の栽培に全力を傾注しましたため、印度園は一時其栽培を閑却致しましたが、其後、再び之を興しました。其頃は已に京濱、阪神其他各地の園藝家が、頗る多量の品種を發賣せるを幸とし、出來得る限り多くの種類を購入試植しましたが、其内には異名同品又は劣等の品種頗る多かつたので、嚴選淘汰の上、特に優秀にして新品たる事一目瞭然たる品種のみを、繁殖發賣することに致して

居ります。

贈種は枝葉共によく我大輪性露菊に似て居ります。花も亦豊大で、花蕾の先端は横して開く、一重咲、八重咲、被咲等變化頗る多く、其八重咲は幾枚雄蕊の化して花輪となるもので、間には「つばき」に類するものも有ります。花色は青白、雪白、淡紅、濃紅、紫等種々である。而して各濃淡、紋り、被輪を顧る色彩に富み、且何れも艶麗、光澤を有し、花輪の豊大と相俟ち、實に見事でありませす。

開花期は品種に依り、遅速早晚の差甚しく、我久留米に於てはツレム内越冬のものは二月末より四月末迄の間に開き、特に早きものは十二月より開くものある程にて、何れも促成開花せしむることが頗る容易であります。促成開花の方法は本文第十五章参照。但該種は一般に我久留米露菊、早月露菊等には比し、暑寒に對する抵抗力弱し、依て暑中は茂葉等にて程よく遮陽を施し、寒中はツレム内に取入るゝか又は藁藎等にて、適宜の防寒を行ふことが必要であります。目下露園栽培の品種は左の通りであります。

- 王 冠 アルバート、エリザベス  
在神中一露菊正の色型にて雪白に紅色の露菊輪三分位に露上り八重咲花心を淡紅色麗美なる巨大輪
- 櫻 時 コメツト  
白地に紅大の露菊及び被咲一重咲巨大輪
- 四 海 マダム、モールアルバ  
光澤ある白色地に淡紅小花吹掛被咲露菊巨大輪、花心を鮮紅色麗美なる被咲を呈す八重咲巨大輪
- 天 女 マダム、モール  
一名甘菜露、被咲地に紅被白露菊八重大輪、露菊ひだ多し
- 曉 山 ロースヘル  
光澤麗色八重巨大輪



櫻時雨



天女

- 曉 山 ティブレイク  
開花の紅被入大輪
- 錦 司 シヨン、モリユウ  
白地に紫紅色小花吹掛り又は星形入り花蕾前々奇色を呈し光澤ある八重咲露菊の大輪
- 富 貴 ファアイルド、マシルタ  
雪白地に朱紅色の吹掛被咲八重巨大輪
- 王 垂 マダム、アールド、スメツト  
淡紅色に白被輪八重巨大輪
- 清 見 シエレスケレット、パール  
雪白地に淡紅被入八重
- 部 富 士 せ、ブライド  
純白色八重大輪早咲

- 乙 荒 女 シモンマドナ  
紫麗色八重大輪
- 大 子 オゼロ  
朱赤色八重大輪 露菊被咲をなす
- 泉 洲 ウエルウエニア、アルバ  
純白色花蕾前々淡紅色を呈す八重大輪
- 派 笑 マダム、ジャンハレンス  
淡麗色八重大輪
- 賀 出 ヒンク、パール  
淡麗色花蕾前々淡麗色を呈す八重大輪
- 龍 の 祝 インヘラトリス、ティンデス  
光澤ある被咲地に本紅の大被白被輪十重大輪
- 龍 田 パーベニヤナ、フアスト  
淡紅白被輪八重露菊早咲



如	月	ドクトル、ケイ、ダブリユ、ゴルム	川	ユテニールドシエン、ヌツテンス
文	明	ラフランス	銀	タリスマン
豊	歳	フラン、エチ、サイテル	花	ハリーナード、デー、アンドリ、アルバ
漁	火	スヒットファイヤ	銀	祭不
観	山	プレシテント、デー、ケルクホフ	花	メモール、デー、エルバンホーテ
大	和	マダム、ジヨス、ペーベネ	火	アホロ

左に弊園實地の鉢植栽培法を記し、各位の御参考に供します。

(一) 移植期 植付後の手當充分なれば、桐葉極暑の外、何時にてもよろし。就中春二月末より五月初迄の間、秋十月末より十二月末迄の間を最良とします。

(二) 鉢 淺きに過ぎる半鉢、極厚手の石焼等にして乾燥不良の鉢を避け、如何様のものにては差支ありません。要するに乾燥適度のものを好みますから、株の幼少のものには、一般草花に用ゆる素焼鉢、大株には土製の本焼腰高又は丸尻等を適當とします。而して鉢は一般に樹の割合に幾分か細き位のものが成績良好であります。又素焼鉢の樹々薄手にて乾燥適度のものは、夏の灌水に無益の勞を要しますから用ひぬが宜し。

(三) 挿土 川砂六升、腐葉土二升、水苔の細く刻みたるもの一升をよく混和して用ゆ。混和の際は細穴の如露又は噴霧器にて少しく濕りを与ふれば混和し易し。

(四) 樹形の作り方 特に自然作りに適し又主作りにも爲し得ますが、斯種は枝葉共に粗大でありますから、久留

米籾蜀の如く精細な枝作りは施さぬ方が宜し、常に注意して徒長枝を剪除することが最も肝要であります。

(五) 灌水、肥料、害虫驅除等 是本文第十二章及第十四章久留米籾蜀に準すれば宜し、葉上灌水を多くすれば、著しく樹の發育を良好ならしめ、且害虫の發生を豫防するの効があります。

(六) 置場 暖氣中は暖簾下、冬はウレーム内に取入れ越冬せしめます。又温室内(最低五十度最高八十度位)にて栽培すれば、冬季も休眠せずして發育しますから、斯くすれば成長を早からしめることが出来ます。

(七) 落花後 是實を結ばしめぬよう花梗より摘去り、直に植替を行ひます。其際は久留米籾蜀の如く庖刀等にて古土を削除せず、僅かに箸、熊手等にて掻き落とし、長き根のみ鉢にて剪除し、前記の植土にて植込みます。植込が済めば直に鉢内の表面全部に二分位の厚さに水苔を敷きます。是れは鉢内の乾燥を調節し、且下葉に土の附着を防ぐの効があります。

繁殖法は挿芽、嫁接、實生何れもよく其目的を達することが出来ますが、其の各方法は本文第十三章に準すれば宜し。其内挿芽は最も世人の嗜好に適する苗木を得ますので、此方法が本邦にては最も多く行はれて居ります。但必ず砂押に依る必要があります。嫁接は活着も安全、成長も迅速であります。何時迄も接合が見えるので餘り多く行はれません。實生は容易に出来ませんが頗る退化し易く、優良の品種を得ることは困難であります。挿分も出来ませんが概して親株が鉢植でありますから、枝が粗大なる爲め、増殖の數も少く又發根不良にて、分取後の成育が思はしくありませんので一般には行はれません。

謹告

私共の春司家は祖先より舊久留米藩有馬侯の領内東久留米村（現今の幣園營業所）に住し代々同村及び廣又の庄屋役を勤め考喜次郎の代に至り明治維新廢藩置縣の後も亦同村戸長を命ぜられました。間もなく考は産業發展實踐躬行の必要を痛感し斷然其職を辭し農業に従事しました。然るに不幸にも幾何もなくして病に罹り福岡病院に入院致しましたが病中唯一の慰安は常に牝の囁むる枕頭一瓶の花神でありました。因て牝に謂て曰く我今に及んで始て花の愛すべきを知れりと。後、病癒えて家に歸り農業の傍花の栽培を始めました。時に明治六年で實に廣樂園の起原であります。其初めは至て微々たるもので加ふるに時運尙到來せず爲めに收支償はず頗る困窮の時代もありましたが敢て之に屈せず一家協心努力の効空しからず遂年順境に入り明治四十四年には福岡に分園を設け大正七年には廣樂園を合名會社となし以て今日に及びました。其間福岡誌中にも述べて居ります通り度々無上の光榮に浴し又海の内外各地に販路の擴張を得各官廳各學校の御用命を蒙ること夥しく現今の營業科目は

- 一 特産久留米籾
  - 一 特産早月籾
  - 一 内外蔬菜及び草花種子
  - 一 内外觀賞植物樹苗
  - 一 園藝用器具藥劑各種
  - 一 庭木各種
- 右栽培販賣並に直輸出入等であります尙詳細は御申越次第營業案内を贈呈致します。
- 右は全く江湖各位の深甚なる御眷顧の賜にして私共一同の日夜感謝仕り居る所であります。就ては今後一層の注意勉強を以て各位の御便宜を旨とし品質の精選は勿論其荷作りは多年の経験に依り輸送距離の遠近を考慮し最も輕便安全に取計らひ、小量の際は郵便、客車便とし大量の際は汽車、汽船、トラック等の便を利用し遠隔の地と雖も毫も遺憾なき程致し以て多年の御愛顧に酬ひ尙將來永遠に御引立を蒙り度き存念に付き何卒秋風の衷心を諒とせられ格々御用命の程懇願仕ります。
- 幣園は九州本線久留米驛より東十餘町（兼合自動車にて約七分間）又九歳電車久留米停留所より四、四町餘。福岡分園は福岡市大濠公園内に經營致し居り博多驛より電車にて約二十分間で達します。共に福岡を主とし四時花卉並に苗木等御觀賞に供えて居りますから隨時御來園を願ひます。
- 昭和九年春 福岡縣久留米市東町（電話五八五番 振替福岡五〇八番）

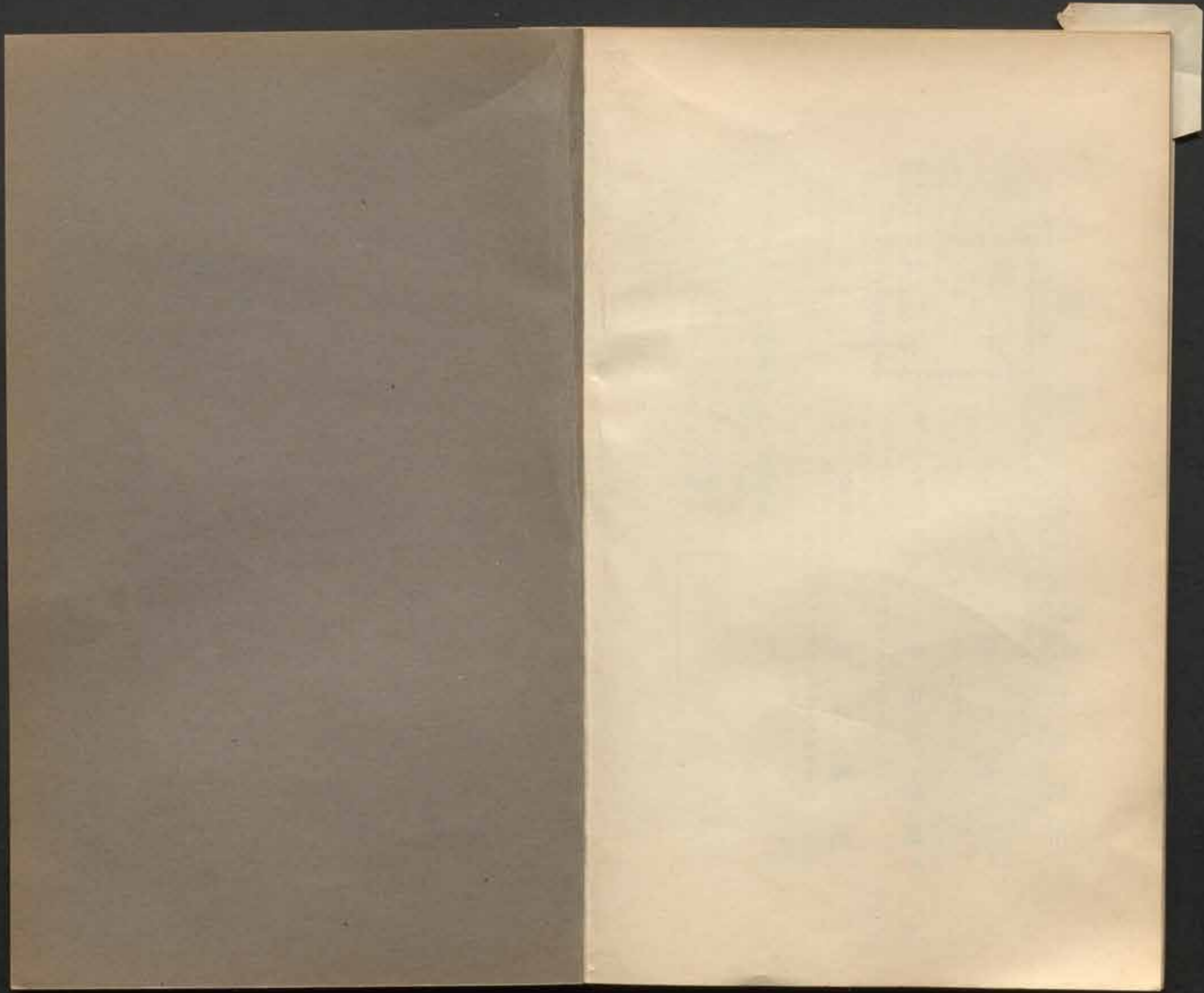
合名會社 赤司廣樂園  
代表者 赤司喜次郎 敬白

明治三十八年一月二十五日印刷  
 明治三十八年一月二十八日發行  
 明治四十三年九月一日第二版發行  
 大正二年八月三十日第三版發行  
 大正八年七月十五日第四版發行  
 昭和九年五月二十五日第五版發行

非賣品



編輯人 赤司辨藏  
 發行所 合名會社 赤司廣樂園  
 大阪市北區堂島上三丁目一五番地  
 印刷人 谷口春雄  
 印刷所 合名會社 谷口印刷所  
 大阪市北區堂島上三丁目一六番地



 50音検索

 難読品種  
読み方一覧

